

ISSN 0918-9904  
研究紀要 第25号

# 坂倉遺跡 — 縄文・弥生時代編 —

2022(令和4)年3月

三重県埋蔵文化財センター



## 例 言

- 1 本書は、三重県多気郡多気町大字東池上字坂倉に所在する坂倉(さかくら)遺跡(遺跡略記号=8FSK、遺跡番号=441-a273)を、三重県営園場整備事業に先立って坂倉遺跡発掘調査団が1974(昭和49)年に実施した発掘調査の成果のうち、縄文時代と弥生時代に関してまとめたものである。尚、当遺跡はこのほかに中世の遺構や遺物も多い。
- 2 発掘調査は、三重県教育委員会の山澤義貴が主担当となり、県教育委員会の藤原寛と多気町教育委員会的小林克己が担当となって実施された。また、これを県教育委員会の小王道明・下村登良男・谷本鋭次・吉村利男等が補佐した。
- 3 発掘調査面積は、北地点(B地区)440 m<sup>2</sup>、南地点(A地区)1,320 m<sup>2</sup>の計1,760 m<sup>2</sup>である。
- 4 本書の編集・執筆は、発掘調査の主担当であった山澤義貴ほかの指導の下に山田猛が担当し、2013(平成25)年11月に一旦校了したものである。尚、2014年3月に一部を追記したが、該当部分にはその旨を明示した。また、一旦寄稿を受けた論文(布谷2021)は、別途先に公表していただいた。
- 5 本書では全て真北を用いた。尚、当該地域の磁針方位は西偏約6度50分(昭和42年)である。
- 6 各遺構は、下記の略記号と3桁の数字を付して表示した。  
竪穴住居=SH 燧道付炉穴=SF 土坑=SK
- 7 本文中に挿入した図表は「挿図表○」、本文の後にまとめた図や表は「第○図」や「第○表」とした。また、写真は「写真図版○」とは別に通し番号を付した。
- 8 当遺跡に関しては下記の文献等で部分的に紹介されているが、本書をもって正報告とする。  
1987年 梅澤裕・山田猛『一般国道1号亀山バイパス埋蔵文化財発掘調査概要Ⅲ 大鼻(二～三次)・山城(三次)遺跡』三重県教育委員会(縄文時代早期土器の主要部分を紹介)  
1992年 奥義次「三重県多気郡 多気町の旧石器・縄文遺跡」『多気町史』多気町(縄文土器等の主要部分を紹介)  
1994年 山田猛・森川幸雄・岸田早苗ほか『大鼻遺跡』三重県埋蔵文化財センター(縄文時代早期土器等の大部分を紹介)  
2003年 小濱学「三重県における縄文時代早期燧道付炉穴の諸相—多気町坂倉遺跡採出例を中心に—」(『富宮歴史博物館研究紀要』12、富宮歴史博物館(燧道付炉穴を紹介))
- 9 縄文時代早期の遺構が検出された南(A)地点(字坂倉389番地)の主要部分(約720 m<sup>2</sup>)は、発掘調査後に多気町によって公有化され、1975(昭和50)年3月27日付けで三重県の史跡に指定されている。
- 10 発掘調査や保存問題及び本書の作成等に際しては、地元各位や多気町教育委員会をはじめとして、澄田正一・安達厚三・奥義次・井上光夫氏等、多くの方々の指導と協力をいただいた。
- 11 出土遺物と関係資料類は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。しかし一部は多気町や個人で保管しており、町保管例と個人蔵例については第1～6表の備考欄に示した。

# 本文目次

第I章 はじめに	1
園場整備事業と調査・保存／地理的環境／歴史的環境	
第II章 遺構と遺物	2
第1節 遺構・土層	2
(1) 北地点	2
(2) 南地点	2
A 竪穴住居	2
SH21/SH22/SH23/SH24/SH25/SH26/SH27/SH28	
B 煙道付炉穴	3
SF1/SF2/SF3/SF4/SF5/SF6/SF7/SF8/SF9/SF10/SF11/SF12	
SF13/SF14/SF15/SF16/SF17/SF18/SF19	
C その他の土坑	7
SK31/SK32/SK33/SK34/SK35/SK36/SK37/SK38	
第2節 遺物	8
(1) I群土器	8
縄文施文土器／撫糸文施文土器	
(2) II群土器	8
縄文／「枝回転文」／市松文／格子文／密接帯状施文	
(3) III群土器	9
(4) IV群土器	10
(5) 土製耳飾り	10
(6) 石器	10
有舌尖頭器／石鏃／削器／その他	
(7) 弥生土器	10
第III章 考察	10
第1節 縄文時代の遺物	10
(1) I群土器	10
縄文施文土器／撫糸文施文土器	
(2) 押型文土器	11
分割成形と器種／成形と加湿・施文／二次ヨコナデと口縁部の外反	
口縁部の外反と頸部文様帯／頸部の刺突文／密接T字施文と密接帯状施文ほか	
(3) II群(大鼻式)土器	17
大鼻式の一般的な特徴／文様／「枝回転文」／大鼻式の地域的特徴	
(4) 伊勢地方の大川式土器	18
大川 a1 式／大川 a2 式／大川 b 式／口・頸部刺突の大川式／地域色の要約	
(5) 石器	20
有舌尖頭器／その他	
第2節 縄文時代の遺構	20
(1) 竪穴住居	20
(2) 煙道付炉穴	20
所屬期ほか／規模と形態等／後出的な煙道付炉穴／立地と風向き／炉の分類と機能	
煙道付炉穴の機能／熱風乾燥と対象物／民俗例／縄張り内の分布／屋内炉と炉上保存	
[註]	27

## 挿 図 表 目 次

挿図表A 煙道付炉穴の部分名称	3
挿図表B 押型文土器の器種	11
挿図表C 施文の深さ及び口縁部の内面二次コナデの有無と外反度	12
挿図表D 三重県下の大鼻～神宮寺式土器	13
挿図表E 大鼻式の属性	14
挿図表F 施文帯の違い	15
挿図表G 各型式の全文様の割合	16
挿図表H 坂倉遺跡の煙道付炉穴の位置と方位	20
挿図表I 煙道付炉穴の方位	22
挿図表J 煙道付炉穴の実験風景	22
挿図表K 炉の分類試案	23
挿図表L 梯田川流域の集団領域	24
挿図表M 重層的な縄張りと煙道付炉穴	25

## 表 目 次

第1表 北地点出土縄文土器等観察表(1)	29	第5表 南地点出土縄文土器観察表(2)	32
第2表 北地点出土縄文土器等観察表(2)	30	第6表 石器観察表	33
第3表 出土地点不明縄文土器観察表	31	第7表 煙道付炉穴の残存値・推定値等一覧表	33
第4表 南地点出土縄文土器観察表(1)	31	第8表 周辺の主な遺跡	34

## 図 版 目 次

第1図 位置図	34	第10図 北地点出土縄文土器等実測図(4)	42
第2図 地形図	34	第11図 北地点出土縄文土器等実測図(5)	43
第3図 北地点平面・土層図	35	第12図 出土地点不明縄文土器実測図	43
第4図 南地点平面図	36	第13図 南地点出土縄文土器実測図(1)	44
第5図 SH21～26、SF11～18実測図	37	第14図 南地点出土縄文土器実測図(2)	45
第6図 SH27・28、SF1～10・19実測図	38	第15図 南地点出土縄文土器実測図(3)	46
第7図 北地点出土縄文土器等実測図(1)	39	第16図 弥生土器実測図	46
第8図 北地点出土縄文土器等実測図(2)	40	第17図 石器実測図(1)	47
第9図 北地点出土縄文土器等実測図(3)	41	第18図 石器実測図(2)	48

## 写真図版目次

写真図版 1	49
1:遺跡遠景/2:北地点全景/3:南地点全景/4:南地点北部/5:南地点中央部	
写真図版 2	50
6:南地点中央部/7:南地点 SH21・23~25/8:南地点 SH21・22、SF14~16 9:南地点 SH23、SF17・18/10:南地点 SH23、SF17・18/11:南地点 SH23、SF17・18 12:南地点 SH24・25、SF13/13:南地点 SF1	
写真図版 3	51
14:南地点 SF2/15:南地点 SF3・4・9/16:南地点 SF4/17:南地点 SF4・8~10 18:南地点 SH21・22・26、SF8~10/19:南地点 SF7/20:南地点 SF8/21:南地点 SF9	
写真図版 4	52
22:南地点 SF11/23:南地点 SH24・25、SF13/24:南地点 SF13/25:南地点 SF14 26:南地点 SF15/27:南地点 SF17/28:南地点 SF18/29:南地点 SF19	
写真図版 5	53
30:土器(表)(1~6・8・9・13・14)/31:土器(裏)(1~6・8・9・13・14)	
写真図版 6	54
32:土器(17~21・89・109・118・121・122・125) 33:土器(24・26・27・31・38・54・58・61・63・69・72・73・77・114・115)	
写真図版 7	55
34:土器(25・33・47・50・57・70・71・81・83・87・91・93・99・101・103・107・119) 35:土器(16・22・62・85・90・102・106・110・113・126・127・235・245~247)	
写真図版 8	56
36:土器・石器(168~172・176・224・240~244・289) 37:土器(178・181・184・186・189・190・194~198・202・205・209・212・214・216・218・227・231)	
写真図版 9	57
38:土器(129・130・138・252・280・286)/39:石器(290~293・295~299・304・307・314)	

## 第1章 はじめに

### 圃場整備事業と調査・保存（第1・2図、写真1）

板倉遺跡は周辺の遺跡であった。ところが、周辺での果園圃場整備事業が昭和49（1979）年度に計画され、板倉遺跡も削平される設計であった。このため、三重県教育委員会と多気町によって「板倉遺跡発掘調査団」が結成され、事前に発掘調査することとなった。調査は県職員を中心に町職員も参加し、昭和49年5月10日から同年6月28日まで行なわれた。

調査は、南（A）地点と北（B）地点の2地区に分けて実施された。調査面積は南地点が1,320㎡、北地点が約440㎡であった。両地点は12m程離れており、北地点は南北約42m×東西約10mと細長い。

調査の進捗と共に縄文時代の貴重な遺跡であることが明らかとなり、県内外からの指導を受けながら保存に向けての協議が重ねられた。その結果、縄文時代の遺構が集中する南地点の主要部分の約720㎡が、昭和50（1975）年3月27日付けで県史跡に指定され、今日まで保存されている。尚、発掘調査で出土した遺物は、県教委と多気町教委が保管している。

**地理的環境（第1～4図）** 板倉遺跡は、南東に流れて伊勢湾に注ぐ柳田川の中流南岸に所在し、玉城丘陵の西に伸びる尾根に接続してわずかに残る上位河岸段丘上に立地する。

遺跡の南地点では、縄文時代早期の竪穴住居や煙道付炉穴が検出された。この南地点は西側に広がる水田より4m程高く、標高は23.78mであった。北地点は南地点から北側への緩傾斜地であり、押型文土器の包含層が重要な地層堆積していた。

板倉遺跡の住人達は、丘陵と氾濫原に臨んだ所を選び、山と川の幸に恵まれて暮らしていたのであろう。

**歴史的環境（第1図、第8表）** 板倉遺跡(1)の所在する柳田川沿いには多くの遺跡が存在するが、その内の代表的なものだけを以下に簡単に触れておく。

旧石器時代から縄文時代早期の石器を出土した遺跡(2～9・34)は、その多くが丘陵上に立地する。

一部(2・4・5)は現在の水田地帯に立地するが、沖積作用が未発達だった当時には低いながらも丘陵上だったと推定される。小型の茂呂系を中心としたナイ

フ形石器や細石刃・種子柴型石斧・木葉形尖頭器・有舌尖頭器等の石器類が採集されているが、詳細は不明である。

縄文時代早期の押型文土器を出土した遺跡は、柳田川沿いに多数知られている。とりわけ、出土土器のほとんどを単一型式が占め、その各々は別型式で構成されている遺跡が集中する点は注目に値する<sup>9)</sup>。すなわち、今回報告の板倉遺跡(1)は大鼻式、鐘突遺跡(12)は大川川式、湧ノ木遺跡(10)は大川a式、射原垣内遺跡(13)は大川b式<sup>9)</sup>、上寺遺跡(11)は神宮寺式である。これらの遺跡は径3km程の内に集中しているため、地域色の相違を考慮する必要も無く型式変遷を確認できるという恵まれた条件を提供している。具体的には、大鼻式と大川式が異所的同時型式ではなくて同所的異時型式であることを明確に示しており、また大川式の細分も可能としている。

さらに、柳田川沿いにはこの頃の遺跡が5～6km間隔で偏在しており、単位集団の領域を示唆しているようである。加えて、同一領域内では同時期の遺跡はほとんどの場合が単一である事実も注目に値する。この事実からは、当地域においては季節的な半定住ではなく、通年の定住をある程度実現していた可能性さえ考えられる。また、約3km内という狭い範囲の中で移住を繰り返しているらしいことから、動物の狩猟よりも植物の採集に重点が置かれた生業形態が推定される。なお、湧ノ木遺跡では、竪穴住居を始めとして煙道付炉穴や集石坑等が検出されている。

前期以降の縄文土器は板倉遺跡でも散見されるが、同時代の遺跡は周辺にも多く(13～21)、大型の有頭石棒や大珠等も出土している。

弥生時代の遺跡(21～24)は多くないが、銅鐮出土の伝承地(22)もある。中期の上器は、伊勢地方の北中部に特徴的な地方色は目立たず、板倉遺跡出土例に見るように大和地方との共通性が強い傾向にある。

古墳時代には、前方後円墳や帆立貝式のほかに大小の群集墳が築造されており(25～37)、面文帯神獸鏡や石剣・銀象嵌鉄刀等が出土している。また、須恵器の窯(38)も営まれている。

奈良・平安時代の遺跡(39～42)も多く、掘立柱礎物や井戸が発掘され、畜車や土馬・円面硯・緑輝風

字硯と共に「中臣」や「中万」等の墨書土器も出土している。

## 第二章 遺構と遺物

### 第1節 土層・遺構

#### (1) 北地点 (第3図、写真2)

縄文時代の遺構は認められなかったが、押型文土器ほかが含ま層や中世の遺構から多数出土した。

表土(1)直下の南部には、中世の遺物包含層(28)が広がる。調査区の北2/3程の地形が約2m低くなっており、地山(64～66)までが早期押型文土器を中心とした縄文時代の遺物包含層群である。そしてこの包含層は、上部(5～27)と下部(28～62)に大別できる。

縄文時代の遺物包含層群の下部のうちでも、地山直上には黒色土や黒褐色土が堆積しており、I・II群の土器が出土している。この上には暗茶褐色土や暗褐色土が広がり、早期から晩期までの土器が出土している。

縄文時代の遺物包含層群の上部は、北方に傾斜しながら重畳的に堆積している。したがって、堆積順と包含遺物が正しく対応するものではない可能性が高く、やはり縄文時代各期の土器が出土している。なお、これらは黄褐色から暗褐色を呈しており、多くの土層に小礫が混入していた。

なお、遺物カードに記された遺構のうちの「23-J上坑」と「25-II上坑」・「25-J上坑」からは、縄文土器のみが出土している。一方、「17-II土坑」や「20-H土坑」・「21-I土坑」・「23-I土坑」・「24-I土坑」・「24-J上坑」からは、縄文土器と共に中世の上器が多数出土している。

#### (2) 南地点 (第4図、写真3～6)

当遺跡の最高所である南地点では、主要な遺構が表土下0.3m程から良好な状態で検出された。

遺構出土の遺物は明らかな限りを記述しておくが、遺構との対応関係が不明確になっているものについては「遺物」の節でのみ触れておく。したがって、出土遺物について触れていない遺構であっても、必ずしも出土遺物がない訳ではない。

#### A 竪穴住居

調査時点でも竪穴住居の可能性を考慮したが「土

坑」として扱ったものの内、その後増加した類別から竪穴住居の可能性が高いと判断される例を、当報告では「竪穴住居」とした。

SH21 (第5図、写真7・8・18) 調査区の中央西寄りに位置し、西半部は楕円状に残存した。S1122やSF14～16と重複するが、前後関係は不明確である。

遺存状態の良い西壁は、緩やかに舟底状を呈する床面に続く。柱穴や垂木穴・か跡・周溝等は認められていない。南東部は不自然な形になっており、別な遺構との重複があったものかと思われる。推定平面規模は径3～4mとなり、残存最大深は0.34mであった。

SH22 (第5図、写真8・18) 調査区の中央西寄りに位置し、北部が半円形に残存した。S1121やSF16と重複するが、前後関係は不明である。

残存する北部はわずかに舟底状を呈する床面に続くが、柱穴や垂木穴・か跡・周溝等は認められなかった。この外側にも弧状を呈する小さな段が検出されており、この部分がSH22の北部外周だった可能性もある。推定平面規模は径3～4m程となり、残存最大深は0.32mであった。

従来はSH21の一部として扱われていたが、ここでは重複した別な竪穴住居の可能性のあるものとしておく。

SH23 (第5図、写真7・9～11) 調査区の中央に位置し、南北にやや長い楕円形を呈すると考えられる。SF18と重複するが、前後関係は不明確である。

北部は比較的残りが良く、緩やかに舟底状を呈する床面に続く。やはり、柱穴や垂木穴・か跡・周溝等は認められなかった。平面規模は南北が4m弱であり、残存最大深は0.28mであった。

SH24 (第5図、写真12) 調査区の西部に位置し、不整形を呈する。SH25やSF13と重



複するが、前後関係は不明である。

壁は緩やかに傾斜し、かすかな舟底状の床面に続く。やはり、柱穴や垂木穴・炉跡・周溝等は認められていない。残存する平面規模は径3.6m程であり、残存最大深は0.18mであった。

大鼻式に属する押型土器(168・232・233・240)のみが出土している。

**SH25** (第5図、写真7・12) 調査区の西部に位置し、東西にやや長い長円形を呈する。西側でSH24と一部が重複するが、前後関係は不明である。

壁は緩やかに傾斜し、やや舟底状を呈する床面に続く。柱穴や垂木穴・炉跡・周溝等は認められなかった。残存する平面規模は径3.2~4mであり、残存最大深は0.25mであった。

大鼻式土器(215・228・236)と、大川式土器らしい小片(248)が出土している。

**SH26** (第5図、写真18) 調査区の中央北寄りに位置し、南北に長い不整形円形を呈する。床面でSF11が検出されていることから、SH26の方が新しいかとも思われるが不明確である。東側には同時存在が不可能な程に近接してSF12が存在する。但しSF12は焼上も無く、不明な点が多い。

南東部以外は比較的残りが良く、緩やかに傾斜して舟底状の床面に続く。やはり、柱穴や垂木穴・炉跡・周溝等は認められなかった。残存する平面規模は長軸で4.2m程であり、残存最大深は0.31mであった。

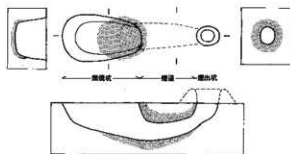
調査時点では縄文時代の竪穴住居とは認識されていなかったが、当報告ではその可能性が高いと判断した。

**SH27** (第6図) 調査区の中央北寄りに位置し、楕円形を呈する。

壁は緩やかに傾斜し、かすかな舟底状の床面に続く。柱穴や垂木穴・炉跡・周溝等は認められていない。残存する平面規模は径3.6~4.5m程であり、残存最大深は0.18mであった。

やはり調査時には竪穴住居としていなかったが、本書ではその可能性が高いと判断した。

**SH28** (第6図) 調査区の北壁寄りの中央に位置し、東西にやや長い楕円形を呈する。南西部で



挿図表A 煙道付炉穴の部分名称

重複するSF5に由来するかと思われる焼土が、SH28の床面に見られた。しかし、SH28がSF5を削平したものか、SH28の施設後間もなくSF5が営まれたものかは断定できない。南接するSF6との前後関係も不明である。

壁は緩やかに傾斜し、ほぼ平坦な床面に続く。柱穴や垂木穴・炉跡・周溝等は認められなかった。残存した平面規模は長径4.6m余りで、残存最大深は0.26mであった。

これも従来は竪穴住居として扱われなかったが、本書ではその可能性が高いと判断した。

#### B 煙道付炉穴 (挿図表A、第7表)

残存状況の良い例では、2基の小土坑をつなぐトンネル状の横穴の天井部が残存しており、本来の形状を知ることができた。遺構内面が焼上化して埋上に炭化物が混じる場合もあり、火を使った遺構であることは明らかであった。トンネル状部の天井が遺存しない例でも同形同大で内面に焼上化が認められたことから、同種類の遺構と調査時点でも判断されていた。こうした種類の遺構は、当地方ではまだ類例が知られていなかったために調査時には単に「炉跡」と呼んでいたが、本書では「煙道付炉穴」としておく。

煙道付炉穴の部分名称は挿図表Aのとおりとする。すなわち、大きい方の土坑部分を「燃焼坑」、小さい方の土坑部分を「煙出坑」、そして両者を結ぶトンネル状の部分を「煙道」と呼んでおく。しかし、現実には煙道の天井部分が残存せずに溝状を呈するだけの例が多いために、部分名称の適用には推測を必要とする場合が多い。そこで、こうした例では「推定部分」の意味を込めて「部」を付けて呼んでおく。すなわち、溝状の幅が広い側を「燃焼坑部」、幅が狭い側を「煙出坑部」とし、その間を「煙道部」と

する。但し、各部の範囲や境界は必ずしも明確ではない。

挿道付穴の方は、燃焼坑から挿道坑を向いて作業したと想定し、真北を基準として燃焼坑から挿道坑に向けた方位を表記することとする。方位の判断基準としては、燃焼坑よりも挿道を重視した。遺存状態が悪くてどちらが燃焼坑か挿道坑か判然としない場合は、幅の狭い側を挿道坑と推定した。また、こうして求めた方位は当然概略であり、厳密なものではない。

尚、19基として報告するが、内2基には疑問も残る。

**S F 1** (第6図、写真13) 調査区北壁寄りの西部に位置する。挿道坑と天井部分を保った煙道が残存した。挿道坑をやや高い側に置き、ほぼS-36°-Wに向けていた。最長部は1.24m、最深部は煙道の前半で0.26mを残していた。

挿道の天井は長さ0.2mを残していた。天井部と同じ高さで燃焼坑に向けてさらに0.6m程焼土が認められていることと、挿道坑側の天井部も多少は崩壊していた可能性があることから、本来の挿道の長さは0.8m以上であった可能性が高い。すると残存した燃焼坑に見える部分も煙道であり、燃焼坑は削平を受けて遺存しないものと理解される。挿道内部は横断面が長円形であり、残存部の幅は0.36~0.43mあったが、高さは約0.18m以下と低い。床面は、華大となる地山のためか焼上化していない。床面は挿道坑に近い煙道がわずかだが最も深く、煙道から燃焼坑に向けて次第に浅くなる。一方、南側は床面が急に立ち上がることから、ある程度削平を受けながらも挿道坑として残っていたと理解される。幅は約0.52mが残存した。

**S F 2** (第6図、写真14) 調査区北壁寄りのやや西に位置する。煙道部の天井は残存せず、浅くて細長い二等辺三角形の土坑状を呈していた。挿道坑部をやや高い側に置き、ほぼS-71°-Wに向けていた。最長部は2.56m、最深部は煙道部の手前(前半)で0.25mを残していた。

床面は焼けておらず、挿道部は燃焼坑部や挿道坑部よりもわずかに深い。煙道部の挿道坑部寄りの幅は0.52~0.44mで、北壁は焼土化していた。燃焼坑

部の端部はやや直線的で、最大幅0.88mが残存していた。

**S F 3** (第6図、写真15) 調査区北西部に位置する。残存した燃焼坑部は、西側に曲がった雨漬状を呈していた。挿道坑部をやや高い側に置き、ほぼN-19°-Wに向け、最長部は1.86m、最深部は挿道部の中央部で0.36mを残していた。

挿道の天井は残存しなかったが、残存部の東壁は約1.2m、西側は約0.9mが焼上化しており、幅も次第に狭くなっていることから、この付近が煙道であったと判断される。但し、北端は幅が狭くて床面も急に立ち上がっていることから挿道坑の一部も残存していたと考えられる。床面は煙道部の中央が他よりも約0.05m深く、燃焼坑部に向けて次第に浅くなる。燃焼坑部は中輪縁よりも西に折れ曲るらしく、残存した最大幅は1.20mであった。

**S F 4** (第6図、写真15~17) 調査区の北西部に位置し、平面は細長い二等辺三角形を呈していた。挿道坑部をやや高い側に置き、ほぼS-23°-Wに向けていた。最長部は2.28m、最深部は燃焼坑部で0.46mを残していた。

挿道部の天井は残存しなかったが、南端近くの西壁の一部は迫り出し(overhang)しており、この部分が挿道の一部であった判断される。床面は焼けておらず、燃焼坑部がわずかながら最も深い。燃焼坑部は最大幅0.92mを残していた。壁の迫り出しが終わった先端は床面が急に立ち上がっており、削平を受けながらも残存した挿道坑部と考えられ、残存幅は0.35m程であった。

大鼻式土器(174・183~185)と捻糸文土器(177)が出土している。

**S F 5** (第6図) 調査区の北壁寄り中央付近の、SII28と重複して検出されたが、前後関係は不明である。やはり煙道の天井は残存せず、浅くやや細長い土坑状を呈していた。挿道坑部をSH28の南側外に置き、ほぼS-60°-Wに向けていた。最長部は1.42m、最深部は煙道部で0.23mを残していた。床面にはSF8に由来すると思われる焼土が認められた。

南側壁の一部が焼けており、この部分は煙道部の一部であったと推定される。床面に焼土は認められ

なかった。西側は幅が0.35m程と狭くなって床面も急に立ち上がることから、削平を受けながらもある程度残った煙出坑部と考えられる。東側も端部付近で浅くなっており、この付近で燃焼坑部に続いていたと思われる。したがって、この間の1m足らずが煙道部と推定される。前半部の残存最大幅は0.88m程だが、東側からの緩い傾斜部分も当遺構の一部であった可能性がある。

**S F 6** (第6図) 調査区の北壁寄り中央部のS II 2 8と重複する。煙道の天井部は残存せず、南半部がややくびれた浅い土坑状を呈する。煙道の焼土もなく、不明な点が多い。SH 2 8との前後関係も不明である。

くびれた南側を煙出坑部と見做すと、SH 2 8の南側外に煙出坑を置き、ほぼS - 0° - Wを向けていた。最長部は1.45m、最深部は煙道部で0.17mを残していた。

**S F 7** (第6図、写真19) 調査区北壁寄りの中央でS II 2 7の北、S II 2 8の東に位置する。煙出坑部をやや高い側に置き、ほぼS - 59° - Eに向いていた。遺構の範囲を狭く考えると残存長は1.19mだが、周りの浅い土坑状部分もS F 7の一部と考え、最長部は2.38mと理解しておく。最深部は煙道部の前半部であり、0.28mを残していた。

横断見通図に拠ると丸味をもって迫り出した焼土が左右に残っていることから、この部分は天井が削平されていたが、横断が長円形を呈する煙道部と判断された。内部の残存最小幅は0.40mで、高さは0.22mを残していたが本来は0.35m程と推定される。両壁に焼土が0.52mの長さで残っていたことと平面形から、本来の煙道の長さは0.8m余りだったと考えられる。底部は焼土化しておらず、燃焼坑部と煙道部の境付近を中心に煙道部付近全体が深い。燃焼坑部に向けては浅くなる一方、煙出坑部の床面は先端に向けて2段をなして浅くなる。煙出坑部の幅は0.40m程であった。

有舌尖頭器(289)が、煙道内から出上している。

**S F 8** (第6図、写真17・19・20) 調査区の北西寄りに位置し、丸味のある長三角形を呈している。天井は崩落しているが煙道は推定でき、ほぼ全形を残している。煙出坑部をやや高い側に置き、ほぼN

- 82° - Wに向けている。最長部は2.28m、最深部は煙道部の奥半で0.36mを残していた。

煙道部内の横断面は長円形を呈し、底部や迫り出す両側壁は焼土化していた。天井部は削平されていた。内部の最小幅は0.36mであり、残存高は0.20mだが復元推定高は0.25m程である。底部から側壁にかけて焼土が約1.10mの長さで認められ、煙道の長さをほぼ示しているかと思われる。この焼土が終わる付近から奥に向けて急傾斜になり、煙出坑部に移る。煙出坑部は、一度平坦になってから先端に向けてまた立ち上がる。煙道部はやや右に曲折しており、最大幅は0.40mであった。床面は煙道部の奥付近が最も深く、燃焼坑部に向けて次第に浅くなる。燃焼坑部の平面形は次第に広がり、端部は丸味をもって終わる。残存の最大幅は1.0mであった。

**S F 9** (第6図、写真15・17・18・21) 調査区北西部に位置し、煙出坑部をやや高い側に置き、ほぼN - 47° - Wに向けていた。天井が崩落しているものの、煙道は推定できる。燃焼坑部に小土坑が重複しており、これを除いた平面形は二等辺三角形を呈し、最長部は2.2m余り、最深部は煙道部の奥半で0.15mを残していた。

煙道部付近の底部と側壁は焼土化していた。急に立ち上がって幅が狭くなっている北西部が煙出坑部と推定される。焼土は0.9m程の長さにとどんでおり、煙道部の長さをほぼ反映しているものであろう。燃焼坑部は最大幅0.86mを残しており、端部には小土坑が重複していた。底部は煙出坑部に近い煙道部が最も深く、燃焼坑部に向かって次第に浅くなっている。

**S F 10** (第6図、写真17・18) 調査区北西部のSH 2 6の西に位置し、平面形は細長い土坑状を呈していた。煙出坑部をやや高い側に置き、ほぼN - 42° - Eに向けていた。最長部は1.52m、最深部は煙道部の奥半部で0.30mを残していた。

煙道部の天井や焼土は残存しなかったが、先端で急に立ち上がって幅も狭くなっている側が煙出坑部と推定される。床面は焼けておらず、煙出坑部側が最も深い。煙出坑部の残存最大幅は燃焼坑部側で0.60m、残存最大深は0.35m程を測る。

**S F 11** (第5図、写真22) 調査区中央北部の

SII26と重複するが、前後関係は不明である。平面形は曲がった雨滴状を呈していた。煙出坑部をやや高い側に置き、S-73°-E程に向けていた。最長部は1.68m、最深部は煙道部の前半で0.31mを残していた。SH26との前後関係は不明である。

煙道部の天井は残存しなかったが、両側壁は0.5m程の長さで焼上化していた。これより先は幅も0.4m程と狭くなって焼上化しておらず底部も急に立ち上がることから、この部分が煙出坑部と推定される。反対の西側は幅が広がっており、燃焼坑部と推定される。なお、この燃焼坑部は中軸線よりも北に折れ曲がっている。床面は煙道部の前半が最も深く、燃焼坑部に向けて次第に浅くなっている。焼上は床面では認められていない。燃焼坑部の残存最大幅は0.90mであった。

**S F 12** (第5図) 調査区中央北部のSII26に重複するが、前後関係は不明である。平面形は雨滴状を呈する。煙出坑部をSH26の外側に置き、ほぼN-28°-Eに向けていた。最長部は約1.8m、最深部は0.14mを残していた。焼土もなく、SH26との前後関係も含め、不明な点が多い。

燃焼坑部は最大1.18mの幅を残していた。底部は全般に平坦である。

**S F 13** (第5図、写真12・23・24) 調査区西部中央のSII24やSII25に接し、細長い二等辺三角形形状を呈する。煙出坑部を高い側に置き、S-55°-W程を向いていた。天井部は欠失していたが煙道部は識別でき、ほぼ全形を知り得るという意味で最も良い例である。最長部は2.46m、最深部は煙道部の前半で0.25mを残していた。SH24やSII25との前後関係は不明である。

最深部分の両側壁は0.7m余りの長さで焼上化しており、この付近が煙道部であったと考えられる。天井部は削平されていたが、内部の横断面は長円形を呈し、迫り出す両側壁は焼上化していた。内部の最小幅は0.42mである。残存高は0.28mだが、復元推定高は0.3m程になる。床面は煙道部の入り口付近が最も深く、燃焼坑部に向けて浅くなる。一方、燃焼坑部では端部に向けて次第に浅くなる。燃焼坑部の平面形は、側壁が直線的で端部に向かって広がり、端部は丸味をもっている。残存した最大幅は0.82m

であった。

**S F 14** (第5図、写真8・25) 調査区中央西寄りのSH21南部と重複するが、前後関係は不明である。やはり煙道部の天井は残存せず、北に向けて広がる浅い土坑状を呈していた。煙出坑部をSH11の南側外に置き、ほぼS-9°-Wに向けていた。最長部は1.60m、最深部は煙道部の前半で0.35mを残していた。なお、中央で重複している小穴はSF14よりも先行するらしい。

煙道部内の横断面は長円形を呈し、迫り出す両側壁は焼上化していた。内部の最小幅は0.43mであり、残存高は0.26mだが復元推定高は0.33m程である。側壁の焼上が1.1mの長さであることから、煙道部の長さもこれに近似していたものと考えられる。縦断見通図から、焼土が途切れた付近から床面が急に立ち上がる部分までの長さ約0.25m、幅0.4m程が煙出坑と推定される。また、反対の北側で焼土が途切れた付近から燃焼坑と考えられ、最大幅0.84mを残していた。

**S F 15** (第5図、写真8・26) 調査区中央西寄りでSH21と重複する。煙出坑部をSH21の東外に置き、ほぼS-83°-Eに向けていた。煙出坑部の天井部は一部が原状を留めていた。最長部は1.50m、最深部は煙道部で0.40mが残存した。他の例から類推すると煙道付近の焼上は本来もう少し長いはずだが焼土の一部が削平されているらしく、SH21との前後関係も不明である。

煙道部内の横断面は長円形を呈するが、底部は平らである。ドーム状の天井や迫り出す両側壁は焼上化していた。内部の現存最小幅は0.27m程であり、高さは0.22mであった。焼上は天井から両側壁にかけて0.65m程の長さで残存しており、この部分の床面が一段低くなっていることから、煙道は0.65m以上の長さだったと推定される。煙道部の東側には煙出坑部が遺存しており、平面は径0.3m程の円形を呈していた。床面は先端で急に壁となって立ち上がる。反対の燃焼坑側は床面が煙道部から遠ざかるにしたがって次第に浅くなっており、最大幅0.8mを残していた。

**S F 16** (第5図、写真8) 調査区の中央部西寄りに位置するSH22の北部と重複する。煙道部

の天井は残存せず、燃焼坑部はやや曲がった土坑状を呈している。煙出坑部をSH22の北側外に置き、ほぼN-32°-Wに向けていた。最長部は1.17m、最深部は煙道部の前半で0.24m程を残していた。SH22によって削平されている可能性があるが不明確である。

煙道付近の側壁は、0.72mの長さで焼土化していた。煙出坑部は、幅が狭くなっている北側と考えられる。煙出坑部の底部は、燃焼坑部から徐々に浅くなった部分で一度平坦部をもつ。SH22の床面で検出された燃焼坑部は大部分が削平されていたが、残存部は西側に曲がっていた。床面は煙道部の前半部が最も深い。

**SF17** (第5図、写真9～11・27) 調査区の中央付近に位置しており、煙出坑部をやや高い側に置き、ほぼN-72°-Wに向けていた。煙道の天井は削平され、燃焼坑部は中世の南北溝に削平されている。最長部は1.61m、最深部は煙道部の前半で0.35mを残していた。

煙道の横断形は長門形を呈しており、最小幅は0.4mであり、現存高は0.26mだが推定高は0.4m程である。側壁に焼土が1.27mの長さで遺存しており、ほぼこの部分が煙道だったと考えられる。焼土が途切れて幅が0.35m程と狭く、底も端部に向けて傾斜を強めている西端部が煙出坑と推定される。底部は煙道部の中央やや手前がわずかながら最も深い。

大川式土器(247)が出上している。

**SF18** (第5図、写真9～11・28) 調査区の中央に位置するSH23と南側に重複しているが、前後関係は不明である。三角形を呈して浅く、煙道の天井は削平されていた。煙出坑部をSH23の南側に置き、ほぼS-9°-Wに向けていた。最長部は1.86m、最深部は煙道部の前半で0.15mを残していた。

煙道部の天井は残存しなかったが、側壁は最長1.03mが焼土化しており、煙道の本来的な長さは1m近くだったと推定される。床面は平坦で、燃焼坑部よりもやや深い。南端の0.26m程は、幅狭で焼土化せずに先端が急に立ち上がることから、煙出坑部と推定される。SH23の床面で直線的に続く燃焼坑部の一部が認められた。

**SF19** (第6図、写真29) 調査区中央のSH23東方に位置し、煙出坑部をやや高い側に置き、ほぼN-33°-Eに向けている。残存した最長部は1.80m、最大深は煙道部の奥半部で0.34mを残していた。

煙道部の天井は残存しなかったが、側壁には焼土が0.52mの長さで残存していた。削平も考慮すると、本来の煙道の長さは0.52m以上だったと考えられる。また、これより先の0.2m弱は焼土化せずに先端が急に立ち上がることから、煙出坑の残存部と推定される。燃焼坑部は中軸線よりも西に曲がるような残存状況だが、それは西側の検出面の方が高かったためと理解される。床面は煙道部から燃焼坑部にかけて平坦である。最大幅0.86mを残していた。

## C その他の土坑

**SK31** (第4図) 調査区北西角に位置する。3基程の土坑が重複したもののようである。

早期初頭(186・187・214・243)と中期末(273～276)という、縄文土器片のみが出土した。

**SK32** (第4図) 調査区西壁の北部寄りに位置する。やはり3基程の上坑が重複したもののようである。

縄文早期初頭の土器片(288)のみが出土している。

**SK33** (第4図) 調査区の北西角近くに位置する土坑である。東西1.72m、南北約0.9m、深さ0.36mを残していた。

縄文中期の上器片(252・255・257・261・263)のみが出土している。

**SK34** (第4図) 調査区北西寄りに位置する。径1.数m、深さ0.53mの上坑3基が重複したものである。

早期初頭の土器(171・175・176・179～182・194・195・209～213・230・231・238・239)のみが出上している。

**SK35** (第4図) 調査区北西寄りに位置する上坑である。東西2.5m、南北1.3m、深さ0.32mを残していた。

早期初頭の土器1点(189)のみが出土している。

**SK36** (第4図) 調査区北西寄りに位置する小穴である。早期初頭の土器1点(227)のみが出上している。

**SK37** (第4図) 調査区西寄りで東西の中世の溝に切られている土坑である。楕円形と細長い土坑の重複したもののようである。一部がSF13と重複するが前後関係は不明である。

縄文中期の土器片(251・262)のみが出土してい

る。

**SK38** (第4図) 調査区中央南西寄りに位置する。4基の上坑が重複したもののようである。

早期初頭の1点(237)と中期頃の底部片(278)が出土している。

## 第2節 遺物

南・北両地点からは、縄文時代早期初頭の大鼻式を中心とした押型文土器等が多数出土した。また、本書(縄文・弥生時代編)では対象外とした中世の掘立建物や井戸・墓坑・土坑・溝等からも、多数の中世遺物と共に縄文時代の遺物も多数出土している。しかし、これらに注記された出土地区や遺構・土層等は、実際のどの遺構から出土したかという対応関係が現状では必ずしも充分に確認できなくなっている。

そこで、出土した縄文土器は南・北両地点をまとめて以下の4群に大別し、型式分類を優先して記述する。

I群: 早期初頭以前の押型文以外の土器

II群: 大鼻式土器

III群: 大川式土器

IV群: 前期から晩期の土器

また、このほかに弥生土器も微量だが出土している。

### (1) I群土器(第2表、第7図)

押型文土器とは考え難い、縄文あるいは燃糸文のみを施したものである。

**縄文施文土器**(1~15) 少なくとも3個体は認められ、いずれも北地点から出土した。縄文のみを施したものであり、押型文土器とは口縁部の外反度や断面形、或いは内面施文という点で相違する。又、胎上も異なったりやや脆弱で厚手であり、色調も違う。

1~7は同一個体片の可能性が高く、口縁部がわずかに外反する深鉢である。内面は口縁部も体部も指圧の後にナデを施しているが、押型文土器のような口縁部内面の強いヨコナデは見られない。その結果らしく、口縁部の外反度は押型文土器よりも弱くなっている。口縁部にも縄文を施文しているが押型文土器のような拡張気味の角頭形にはならず、丸棒状を呈している。口縁部には横位、体部には縦位に

異なる原体で縄文を施している。縄文は、いずれも太い繊維を強く擦った複節である。全体的に灰黒色を呈しており、口径は30cm程である。主要な破片(1~5)が注記されている「23-」土坑を現状では特定できないが、大鼻式土器も出土している。その他の縄文施文例(6・7・10~15)は体部片である。押型文土器で体部に縄文を施す例は例外的な密接帯状施文の例以外に無いことから、これらの体部の縄文施文片はI群に含めておくこととする。

8は緩やかに外反する口縁部であり、口唇断面形は丸棒状を呈する。口縁部内面に縄文を1帯横位に施文している。外面には単節らしい1帯を横位に施し、以下にも回転縄文を残しており、羽状を呈している。各部位の縄文は、太くて軟らかな繊維を強く擦ったものである。砂粒が多く含まれ、赤褐色を呈している。このほかに、同一個体らしい1小片がある。いずれも包含層からの出土である。

9は外反する口縁部片である。口縁部の断面形は、外側にやや拡張気味の角頭形を呈している。内面にも縄文を横位回転施文しており、この点が一般的な押型文土器とは異なる。口唇部と外面にも横位回転縄文を施し、頭部には縄の側面圧痕を1条残している。注記のある「21-」上坑を現状では特定できないが、大鼻式や中世の土器が出土している。

**燃糸文施文土器** 北地点からの出土例(16)は、太く疎らかな燃糸文を縦位に深く施した口頸部直下の体上部片であり、上端に側面圧痕らしい1条が残る。内面には指圧痕とナデを残している。包含層からの出土であり、押型文土器との共存関係は不明である。南地点からも3点している。深く疎らに施した例(178)もあるが、その他(176・177)は不詳である。

### (2) II群土器(第2~5表、第7~10・12~14図)

早期初頭に属する押型文土器の大鼻式である。端部が角頭形で短く屈折する口縁部と尖底をもつ。内

面には指圧痕を残すが、口縁部の内面には端面施文後に二次ヨコナゲを施して平滑に仕上げている。口唇部には専ら回転縄文を施す。口縁部外面には左から右への回転或いは押圧が刺突の縄文、そして体部には押型文を上から下に縦位密接施文することを原則としており、これらは便宜的に「密接T字施文」と呼んでおく。しかし、一部には、後述するように「密接帯状施文」と呼んだ例外的な文様構成の例もある<sup>9)</sup>。

口縁部は23点(17~23・87・89・109・118・120・145~147・168~174・241)が認められたが、本来の個体数はさらに多かったと思われる。口径の計測できた例では、18.6cm(18)と19.6cm(169)、23.8cm(118)であった。但し、より大口径であったと推定される例(117)もある。底部は1点(244)のみが出土しており、施文が認められない。施文原体の大きさが推定できた3・4例では、平均で長さが25.3mm、径が7.2mmであった。

なお、本書では、口縁部外面に押型文を施した例は大川式に含めている<sup>9)</sup>。

**縄文** 口唇部は例外なく回転縄文である。口縁部外面も縄文を原則としており、横位回転(18・20・89・109・145・147・168・172)や側面圧痕(17・19・118・120・146・169・171・173・174・241)と、先端刺突(21・23・170)の例がある。縄文はどの部位であっても多くは単節であるが、一部には複節も見られる。原体は太くて軟らかく、強く撻られているのが通例である。

なお、体部に縄文を施すことは原則的に無く、密接帯状施文の一部のみ見られる。

大鼻式における縄文は、文様全体の32%(延べ196点中46例)を占めており、その内で側面圧痕が11%(13点)、先端刺突が2%(6点)、回転縄文が20%(27点)である。

**「枝回転文」**(24~79・147~161・179~225) 布谷論文<sup>9)</sup>において、植物生態学の立場からは小枝が原体とは考えがたい、と指摘があった。しかし、現段階では小枝以外の何が原体かを特定できていないため、便宜的に括弧付きで「枝回転文」と呼んでおく。

大鼻式における「枝回転文」は、文様全体の52%(延べ196点中118例)を占めている。小枝が原体で

あるという通説を念頭に置き、画然と区別できるものではないが、凹文部の形状が未加工で三角形に近い定型な一群(a)とその他(b)に分けてみた。しかし、出土した遺構や層位による違いは認めがたかった。

**市松文**(80~104・162・163・226~240) 各々の凹凸部が角張った一群(k)と縦長の一群(t)、横長の一群(y)、丸味を帯びた一群(m)に細分してみた。しかし、やはり画然とした区別ができるものではなく、出土した遺構や層位にも違いは認めがたい。原体の推定復元できた例(81)では、長さ18mm、径5mmであった。もう1例(240)は長さ27mm、径9mmを測った。

大鼻式における市松文は、文様全体の18%(延べ196点中42例)を占めている<sup>9)</sup>。

**格子文**(105~120・241~243) 正格子文の一群と斜格子文の一群に細分したが、やはり画然とした区別ができるものではなく、出土した遺構や層位にも違いは認めがたい。原体の推定復元できた正格子文の例(106)は長さが32mmがそれ以上であり、斜格子文の例(118)では長さ24mm、径7.5mmであった。

大鼻式における正格子文は、文様全体の5%強(延べ196点中11例)を占め、斜格子文は4%強(9点)を占めており、合計すると10%(20点)となる。

**密接帯状施文** 後述(16~18頁)するが、「密接帯状施文」とは口縁部横位1帯、体部縦位の密接施文という一般的な原則(密接T字施文)に反する文様構成の例を指している。坂倉遺跡の大鼻式土器196点中8点のみであり、4%と例外的存在である。

口縁部直下に横位施文帯をもつ例(22・23・46・56・89)もあるが、この部分は器形としては明らかに口縁部や頸部ではなくて体上部に属する。また、口縁部や体部へ異なる文様を縦位帯状に施した例(76・109・163)もあり、この場合にのみ体部への縄文施文が見られる。

### (3) Ⅲ群土器(第2~5表、第10・12~14図)

大川式の例である。口唇部には、回転縄文の例(121~125・147・245)と丸棒状具による並行刺突文の例(246・247)がある。口縁部外面には、1帯の市松文を横位に施している例(121~125・245・246)と丸棒状具による刺突文の例(247)、及び枝回転文か

と見える例(247)がある。頭部片(126、127、248)には、丸棒状具による刺突文を右や下から施している。体上部に押型文らしい斜行沈線文帯をもつ例(126)は、着接帯状施文に属する。

施文本体の大きさが推定できた4例では、平均で長さが17.9mm以上、径が4.9mmであった。

#### (4) IV群土器(第2・3・5表、第10～12・14・15図)

南北両地点から各期の縄文土器片が少量出土したが、遺構との関係やまとはり認められなかった。

前期の例(249)は、C字形の連続爪形文を2段とその下に縄文を残すらしい。北白川下層2式に属する。

中期の土器は、早期の押型土器に次いで多い。前葉から中葉の例としては、口縁部に連続C字爪形文と半截竹管文をもつ五領ヶ台式例(250)と半截竹管文を伴う細降線をもつ勝版式例(128)、船元式に属する粗い縄文らしい地文に棒状具の刺突文等をもつ例(251)や粗い燃糸文の例(254)、半截竹管による波状文とヘラ描連弧文をもつ里木式例(129)がある。後葉の例は多く、波状口縁の北白川C式例(252)や肥厚した無文の口縁部より下に縦位弧状の半截竹管文をもつ例(259～261・272)をはじめとして、沈線や縄文をもつ例等(130～140・164～167・252・253・255～258・262～271・273～278)があるほか、後期の可能性のある例(140)も含む。

口唇に刻目を入れて外面に羽状条痕と内面に横位条痕を施した例(141)は、壺の体部片(142)と共に晩期に属するものであろう。

#### (5) 土製耳飾り(第11図)

滑車状の上製耳飾り(144)が1点出土している。焼成は良好で黄土色を呈し、ほぼ正形で彩色等は認められない。径26.5mm、最厚14.5mmを測る。包含層からの出土のため、所属期は不明だが、晩期の可能

性であろう。

#### (6) 石器(第6表、第17・18図、写真36・39)

石器類は、有舌尖頭器1点と石鏃類6点、楔形石器1点、削器2点、リタッチド・フレイク(RF)1点、ユウズッド・フレイク(UF)7点、石核2点、剥片4点及び石剣1点を掲載できた。このほかに、石核や剥片等が採集されているが、そのほとんどはチャートである。

**有舌尖頭器**(289) 南地点の埋没付か穴(SF7)の煙道内から出土した。先端を欠損し、現存長は45mmである。両面に押圧剥離が施されたチャート製である。

**石鏃**(290～295) いずれもやや凹基の無茎であり、重量は0.17～0.48gである。いわゆるロケット鏃(290)と三角形鏃(291)、及び五角形鏃(292)がある。1点(294)はチャート製だが、その他はサヌカイト製である。未成品らしい例(295)もある。

**削器**(296・297) 剥片素材の表面両側に鋭利な刃部が作り出されたサヌカイト製品(296)と、刃部が簡単に作られたチャート製品(297)がある。

**その他**(298～314) 楔形石器(298)とRF(304)とUF(299～303・305・306)と剥片(307～311)・石核(312・313)のほとんどはチャートだが、泥岩も少量みられる。また、緑色片岩の棒状素材を磨いて鈍い刃部を作り出した、晩期の所産かと思われる石剣(314)もある。

#### (7) 弥生土器(第16図、写真38)

弥生土器が、微量だが各地点から出土している。前期の例(279・280)は共に壺の肩部分であり、削り出し技法が見られる。中期に属する破片には、壺(281～287)と甕(288)がある。壺には、凹線文や簾状文・流水文、及び棒状具や二又状具による横線文や波文が均等に施されている。

## 第三章 考察

### 第1節 縄文時代の遺物

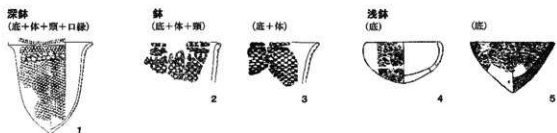
#### (1) I群土器

I群は、押型土器とは判断しかねる土器群であり、縄文施文のみと燃糸文施文のみの2種がある。

**縄文施文土器**(1～15) 全てが北地点から出土

した。口縁部が緩やかに外反して口唇が丸棒状を呈するもの内で、口唇に縄文を施す例(1・2)は、口縁部の内面に至るまで指圧痕を残したままである。このように体部のみならず口縁部にまで指圧痕を残





挿図表B 押型文土器の器種(1~3:清ノ木遺跡、4:岐阜県渥美遺跡、5:和歌山県高山寺遺跡)

す例は、草創期に多く見られる。これに対して大鼻式では、頸部以下に指圧痕を残したままだが、口縁部には強い二次ヨコナデを施して指圧痕を消しており、製作技法上の相違が認められる。ちなみに大川式以降では、体部内面も二次ヨコナデによって平滑に仕上げられるようになる。

外面には、原体を変えた羽状縄文を横位に施している。これに対して、大鼻式では羽状縄文例は密接帯状施文例以外には認められない。また、大鼻式では縄文原体がより軟らかく強く磨らされている。

口唇が無文の例(8)は、口縁部内面に大鼻式よりも粗い回転縄文を1帯施している。同一個体らしい体部片も同様な縄文が施文されており、押型文は見られない。

一方、同じ縄文施文例でも口唇が角頭形で口唇と口縁部の内外に縄文を施した例(9)もあり、内面にも縄文を横位に1帯施文する点が大鼻式と相違する。このように口縁部断面形は大鼻式に類似するが内面に1帯の縄文をもつ例は、大和の鶴山遺跡にも類例(90)がある<sup>8)</sup>。鶴山遺跡例では、屈折がやや弱い頭部に縄の側面圧痕、体上部に羽状縄文を施している。この羽状縄文が密接帯状施文によるものでこれ以下は押型文なのか、それとも体部全体が縄文で押型文は施されていないのかは不明である。押型文が施文されていないは大鼻式の密接帯状施文例、無ければ大鼻式ではないことになるが、この破片では断定できない。今は、大鼻式らしくない要素を持つ例として注意しておきたい。

このように、口縁部の外反度や口唇の断面形、口唇の無文例、口縁部内面の縄文施文や調整、縄文原体や施文手法等は、大鼻式以降の一般的な特徴と明らかに異なる<sup>9)</sup>。これらは、大鼻式直前の先行型式か、

大鼻式に共存する縄文施文土器かは現段階では断定できない。また、先行例と共伴例の両方を含む可能性も否定できない。しかし、やはり型式論的には大鼻式に先行する要素と考えるべきであろう。

**縹糸文施文土器** 太くて疎らな縹糸文を深く施す例(16)は北地点からの出土である。その他の例(176~178)も含めて押型文土器との関係は不明である。

## (2) 押型文土器

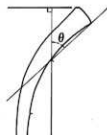
伊勢地方を含む少なくとも近畿・東海地方における前半期の押型文土器には、多くの共通点がある。そこで、まずこれらの共通する特徴を確認しておく。

尚、各部位の施文方向から、大多数の製作者は右利きであったと推定する立場に立っている。したがって、例外は主として左利きと見做している。また本書では、土器の断面実測図では粘土紐の継目を破線で、擬口縁を細い実線で示している。

**分割成形と器種(挿図表B)** まず、継目と内面に残る凹凸によって、幅2cm程に伸ばされた粘土紐を巻上げて成形したことが窺われる。継目はやや内斜して上向きに盛り上がることから、土器を正立状態で成形したと判断できる。粘土紐を密着させながら器壁として成形した際の指圧痕は、大鼻式では体部と底部の内面に残したままだが、口縁部内面は二次ヨコナデによって平滑にナゲ消している。しかし、大川式以降の各型式では内面全面を平滑に仕上げている。

継目のほかに擬口縁も見られる。この位置は体部途中にもあるが、底・体部境と体・口縁部境に多いらしい。したがって、底部までと体部の途中まで及び口縁部直下まで成形した段階で3回以上は休止し、自重で形が崩れないままで乾燥するまで待たさう、分割成形技法であったことが確認できる。

型式名	遺跡名	施文の深さ	二次ヨコナデ		外反度		林縁=二次ヨコナデの出典率 折縁=口縁部外反度
			有	無	点数	度数	
大鼻式	坂倉・大鼻		100%	0%	23点	56°	6点
大川a式	西田・大鼻	深い	85%	15%	13点	54°	3点
大川b式	岡ノ木		65%	35%	37点	50°	13点
大川c式	相模川内・西田		34%	33%	28点	44°	4点
神宮寺a式	中出向・花代	浅い	0%	100%	6点	27°	1点
神宮寺b式	井ノ広		0%	100%	14点	15°	1点
「葦平型」	根越下池北	浅い			23°	1点	



挿図表C 施文の深さ及び口縁部の内面二次ヨコナデの有無と外反度(大川b式の二次ヨコナデ有無不明33%は除く)

ところが、擬口縁を生じる小休止は底・体部間と体・頸部間及び頸・口縁部間にあるが、どこかでそれ以上の成形を終了させた器形が希にある。

挿図表Bの1は典型的な「深鉢」であり、途中で成形を終了させることなく底・体・頸・口縁部から成っている。しかし、2は底・体・頸部から成り、口縁部を欠く。3は底・体部から成り、口縁部と頸部を欠く。この2と3は深鉢でも浅鉢でもなく、狭義の「鉢」と呼ぶべき器種である。共に最上部は口縁部のようにやや外反して口唇施文しているが、成形上は口縁部でないはずの部分が口縁部の位置になった結果の変化である。また、4・5は底部のみから成る「浅鉢」であり、体部以上の成形をしていない。

坂倉遺跡ではこうした例外的な器種はなく、通常の外反する口縁部をもつ深鉢のみであるらしい。しかし文様帯を考えるに際しては、まず浅鉢や鉢を除いた深鉢に器種を限定して論を進めたい。

尚、神宮寺式以降は浅い器形となり、文様帯は1帯に収められる。これは、それまで口縁部であった位置の分割成形が省略され、成形上は鉢になった結果である。

**成形と加湿・施文** 時空は異なるが、立野式の擬口縁は長く内斜しており、上から被せた粘土紐が剥離した例では、この剥離面に以下と一連の施文が認められる場合がある。これは、分割成形の段階毎に横位施文したことを物語っている。

一方、当地方の大鼻式や大川式・神宮寺式ではこのような例は認められず、擬口縁は縁目と同様に短くて剥離面に文様は認められない。これは、粘土の軟らかさのために形が崩れることのないように、擬口縁毎にある程度乾燥させて全体を成形し、その後施文した結果と考えられる。このような相違は、

立野式では横位(密接逆T字施文)、大鼻・大川・神宮寺式では縦位(密接T字施文)という、それぞれの成形に即応した体・底部施文方向に対応しているのであろう。

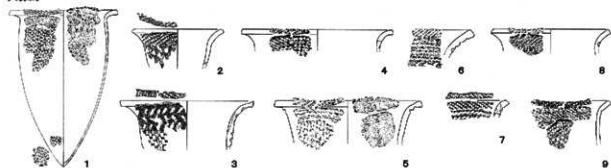
そして、ある程度まで乾燥させて完形としたままで施文したのなら、施された文様は浅くなるはずである。しかし、当地方の大鼻式や大川式では、どの部位の文様も一律に深く施文されている。また、分割成形の単位毎に乾燥度が違って文様の深さが異なるということも無い。したがって、器形が分割成形によって完成した後改めて器表全体を加湿し、軟らかくした後に施文したと考えられる。ところが、大川b式期を過度期として以降は施文が浅くなる。それは、施文前の加湿工程が簡略・省略化されていた結果と理解される。

**二次ヨコナデと口縁部の外反**(挿図表C) 周知のように、口縁部は大鼻式で屈折し、大川a式では強く屈折するが、大川b式以降は屈折・外反が次第に緩くなる。その理由は下記のように考えられる。

すなわち、まず成形時に二次ヨコナデ等を施す。次に器表を加湿し、施文する。そして最後に、施文によって歪んだ口縁部を整形するための二次ヨコナデを口縁部内面に施す。ところが、この二次ヨコナデは型式を迫るに従って次第に弱くなり、施さなくなる。こうして内側からのナデが一次のみになると、当然の結果として外反はその分だけ弱くなることによる。

では、なぜ二次ヨコナデを施し、なぜ次第に省略するのか。この疑問には、成形手法から答えが得られる。すなわち、大鼻式や大川式等は完形にまで成形した後施文していることに起因する。前述のように擬口縁毎に小休止しながら口縁部まで成形すると、器壁は当然乾燥が進んでしまう。このため、施

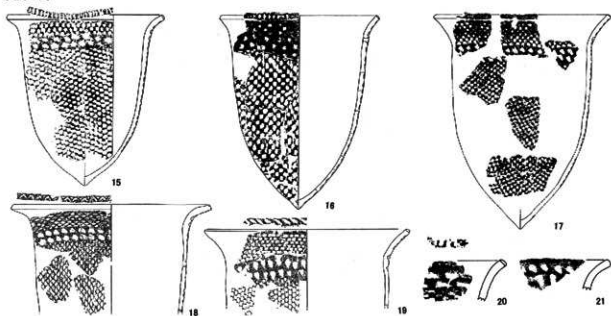
大鼻式



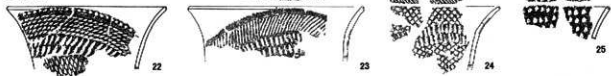
大川a1式



大川a2式



大川b式



神宮寺式



挿図表D 三重県下の大鼻～神宮寺式土器(1・10:大鼻遺跡、2・3・7・11～13・18・19・23・24・26～33:西川遺跡、

4・6・8・9:灰倉遺跡、14～17・28:鴻ノ木遺跡、20・21・27:籠突遺跡、22・25:射原垣内遺跡、34:花代遺跡)

文前に再度器表を加湿しており、結果的に文様は深く施される。ところが、大川b式を過渡期として施文が浅くなることから、加湿工程は次第に省略されたと推定される。するとやや乾燥したままのために強度が保たれ、施文という加圧による口縁部の変形が少なくなり、結果的に整形のための二次ヨコナデの必要性も薄れていったのであろう。

尚、二次ヨコナデの有無は口唇部文様の内面側がナゲ消されているか否かで判断できるが、大川b式になると施し方が弱いためには有無を断定できない例が増える。しかし、大川b式を過渡期として二次ヨコナデは神宮寺式では全く見られなくなり、製作技法からする型式分類の一要素となる。

このように、器表への加湿の有無や施文の深淺と二次ヨコナデの有無及び口縁部の外反度等は連動していたと考えられる。そして、それは器形や文様帯及び施文手法等の変化を引き起こし、結果的に型式変化となっていると理解される。

**口縁部の外反と頸部文様帯** (挿図表D) 当地方の一般的な施文手法である後述の密接T字施文例では、口縁部や体・底部への回転施文は、左手で内側

遺跡名	口縁部	底部	その他	合計
坂倉遺跡	14 (16%)	1 (1%)	72 (83%)	87 (100%)
大島遺跡	17 (17%)	1 (1%)	81 (82%)	99 (100%)
粟津遺跡	23 (41%)	1 (2%)	32 (57%)	56 (100%)

a 部位別点数 (挿図例・口縁部型文、具系純は除く)

文様名	坂倉	大島	坂倉・大島	粟津遺跡
瓶文	20 (20.5%)	20 (18%)	40 (19%)	27 (50%)
「枝田」文	50 (51%)	79 (72%)	129 (62%)	24 (44%)
市松文	20 (20.5%)	9 (8%)	29 (14%)	3 (6%)
格子文	8 (8%)	2 (2%)	10 (5%)	
合計	98 (100%)	110 (100%)	208 (100%)	54 (100%)

c 全文様 (瓶文、斜文と口唇以外の文様は除く)

遺跡名	坂倉	大島	坂倉・大島	粟津遺跡
出現率 (%)	7% (6/87)	3% (3/99)	4.8% (9/186)	92% (14/17)

d 密接施文例の割合

遺跡名	直径 (mm)	長さ (mm)
12	7.5	24
99	5	18
64	-	32
91	9	27
平均	7.2	25.3

f 坂倉遺跡の押型文様帯の大きさ (筆者測定)

遺跡名	直径 (mm)	長さ (mm)
21	7	31
32	-	18
37	12	25
38	12	24
78	12	27
93	11	22
平均	11	22

g 大島遺跡の押型文様帯の大きさ (筆者測定)

遺跡名	直径 (mm)			長さ (mm)		
	平均	例数	最小～最大	平均	例数	最小～最大
坂倉	7.2	3	5～9	25.3	4	18～32
大島	10.8	5	7～12	24.5	6	18～31
坂倉・大島	9.4	8	5～12	24.8	10	18～32
粟津遺跡	8.9	8	8～10.8	28.8	12	23～35

i 押型文様帯の大きさ (総括)

遺跡名	数 (%)	
	回転手法	非回転手法
坂倉	6 (43%)	8 (57%)
大島	8 (47%)	9 (53%)
坂倉・大島	14 (45%)	17 (55%)
粟津遺跡	6 (46%)	7 (54%)

e 口縁部施文手法

遺跡名	直径 (mm)	長さ (mm)
13	8.6	30
14	10.8	30
15	7.6	35
17	7.6	35
29	9	31
30	8.9	29
31	8.9	28
32	9.2	23
33	8.0	28
36	9.2	25
49	-	30
51	-	28
平均	8.9	28.8

h 粟津遺跡の押型文様帯の大きさ

から支えながら右手で施したと推定される。このため、正対して見ると口縁部は左から右に、体・底部は上から下に施されている。しかし、頸部が内湾面をなしている大川式では押型原体の中央が器面に接し切れず、施文しづらい。ところが、当地方の押型文土器は密接施文指向である。

大鼻式では二次ヨコナデが狭い範囲に強く施されるために口縁部は屈曲と云うより短く屈折し、頸部としての幅を持たない。その結果、口縁部が屈折する大鼻式では無文部が生じない。そこで、一定の幅をもった頸部文様帯を設ける必要も無く、一部に区画的な文様が有るに過ぎない。

しかし大川式では、やや広い範囲すなわち少し下まで二次ヨコナデが施されるために、口縁部は屈折と云うよりも屈曲する。この屈曲面では回転施文が困難であるために、そのままでは無文部が残り易い。そこで土器を正対させ、曲面でも施し易い刺突文を利き腕で施し、大川式に特徴的な頸部文様帯を形成している。

ところが、二次ヨコナデが省略されて外反の弱まった神宮寺式では回転施文の難しい屈曲面が消失し

文様名	坂倉	大島	坂倉・大島	粟津遺跡
頸部押型文	2 (2%)	2 (1%)	4 (1%)	6 (10%)
先端刺突文	1 (1%)	1 (1%)	2 (1%)	1 (2%)
回転施文	4 (5%)	1 (1%)	5 (3%)	14 (22%)
枝田文	48 (60%)	70 (83%)	118 (71%)	38 (61%)
市松文	20 (25%)	9 (11%)	29 (18%)	3 (5%)
格子文	5 (6%)	2 (2%)	7 (4%)	
斜格子文	2 (3%)		2 (1%)	
無文	1 (1%)		1 (1%)	
合計	80 (100%)	85 (100%)	165 (100%)	62 (100%)

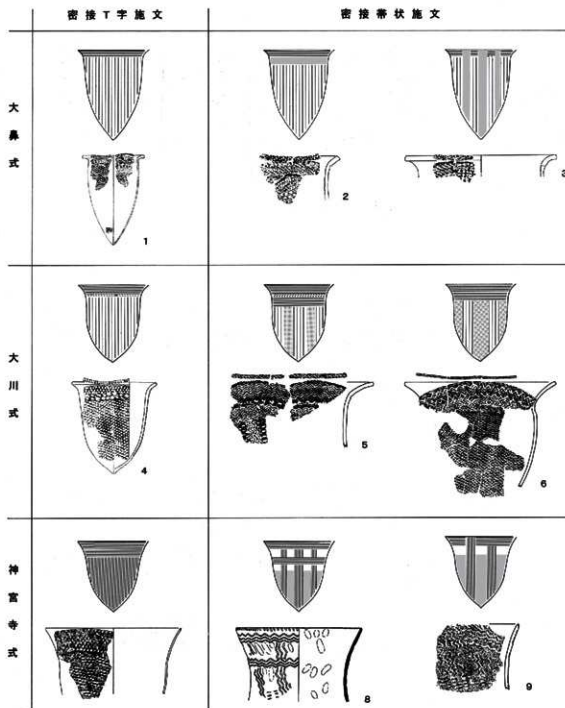
b 体・底部文様の種類

挿図表E 大鼻式の属性 (\* 頸部・横溝文には特殊形・新格子・平行四辺形等を含む、粟津前庭遺跡はB12報告書から)

た<sup>9</sup>。このために文様の不整合面が施文し切れずに無文部として残ることも無くなり、これに伴って無文部を充填する頭部文様帯も消失していく。その結果、器面全体への施文方向も縦位・横位・斜位のいずれかのみで単一文様構成へと収斂していく。さらに、こうして裝飾性が乏しくなった後には押型文の内面施文が出現し、やがて波状口縁も出現する。

**頭部の刺突文** (挿図表D・F) 大川式では頭部

に刺突文を施す例が主体をなすが、この多くは右下からの施文である。具体的に、鴻ノ木遺跡の大川a2式では92% (65点) が右、3% (2点) が左、5% (3点) がその他である。また、鴻ノ木遺跡と射原垣内遺跡の大川b式例では95% (105点) が右である。加えて、左右いずれの場合もやや下からの施文が多い。このことから、上器に正対して利き腕でやや下方向から施した結果と推定できる。



挿図表F 施文帯の違い(1:大鼻遺跡、2・3:板倉遺跡、4:鴻ノ木遺跡、5・6:大川遺跡、7:神宮寺遺跡、8:低谷遺跡、9:栗津湖底遺跡)

型式名	大鼻式	大川a式	大川a式	大川b式	神宮寺a式	神宮寺b式
遺跡名	坂倉・大鼻	西出	鴻ノ木	射原垣内	申出向・花代	井之広
基点数	224	48	273	317	100	121
側面押汗縄文	18 (8%)	1 (2%)				
先端刺突縄文	6 (3%)	2 (4%)				
回転縄文	42 (19%)	22 (46%)				
「枝回転文」	118 (52%)					
市松文	29 (13%)	20 (42%)	123 (45%)	18 (6%)		
正格子文	8 (3%)		+	5 (1%)	2 (2%)	6 (5%)
山形文			2 (1%)	27 (9%)	11 (11%)	5 (4%)
額ネガ「槽」文	2 (1%)		+	156 (49%)	80 (80%)	96 (79%)
原体側面押汗			61 (22%)	5 (1%)	2 (2%)	1 (1%)
棒状刺突文		3 (6%)	83 (30%)	22 (7%)	2 (2%)	
鳥状刺突・刻			3 (1%)	77 (24%)		
その他				2 (2%)	1 (1%)	
無文	1 (1%)		1 (1%)	5 (1%)	2 (2%)	13 (11%)
1個体文様種類数	2~3	3	3	3	2	1
1個体施文手法数	2~3	2~3	3	3	2	1
1個体文様原形数	2	2	1	1	1	1

挿入表 G 各型式の全文様の割合（「額ネガ槽」文には特殊変形・斜格子・平行四辺形的な例を含み、大鼻式では斜格子を含む。  
「棒状刺突文」には内線と角線を含む。「+」は当該遺跡には無いが型例には有る場合）

さらに付言すると、上記のような右方向の多さは伊勢地方に特に顕著である。こうした地域性は、一見ただけでは違いが目に付かない同一土器型式圏内でも、土器製作者の姿勢や持ち方等の製作流儀は微妙に異なるという、同一土器型式圏内における生産圏の相違に起因すると推定される。このような事象は、伊勢地方では大川b式まで頸部文様帯が残る例が多い事実や、密接帯状施文例が少なく、大川a式を最後に縄文が消えてしまう等の点にも共通して見られる。

#### 密接T字施文と密接帯状施文ほか（挿入表E・G）

前述のように、前半期の押型文土器は頸部文様帯の有無に拘わらず、施文は無文部を残さずに密接施文することを原則としている。

この内の大多数を占める例は、正対して見た場合に口縁部を左から右に横位施文し、次に体部と底部を一体として上から下へ押型文を縦位施文している。尚、大鼻式や大川式には口縁部に非回転手法を用いた例もあるが、これらの施文方向は確認できない。しかし、横位文様帯であることには変わらない。そして、体・底部文様は縦位施文とは云え、垂直ではなくてわずかに右下がり気味の例が多い。したがって、土器の口縁部を手前にして寝かせ、左手を内側から入れて支えながら、右手で手前から向こう側に回転施文したものと考えられる。次に、口縁部外面が回転文の場合、そのままの姿勢で口縁部外面に製

作者にとって右から左、すなわち正対した上器を見た場合には左から右に施文している。

このように口縁部を横に、以下を上から下に施文する例が9割以上を占めており、あまりに一般的な施文原則であるために特に名付けなかったが、その他の施文原則との比較のために「密接T字施文」と仮称しておく。

ちなみに、信州の立野式は口縁部縦位、体・底部横位と逆であり、いわば「密接逆T字施文」とも呼ぶべき施文原則である。

しかし、当地方における一般原則である密接T字施文に対して、例外も存在する。具体例として坂倉遺跡では、口縁部直下に横位施文帯をもつものや、口縁部や体部へ異なる文様を口縁部から縦位帯状に施したものが僅かながら存在する。そして、類例は各型式に認められる。そこで、こうした密接T字施文と異なる施文原則の例は、「密接帯状施文」と呼んでおく。

この密接帯状施文の大鼻式での出現率は、坂倉遺跡では7%（87点中6点）、大鼻遺跡では3%（99点中3点）である<sup>9</sup>。又、鴻ノ木遺跡の大川a式でも2%（137点中3点）、射原垣内遺跡の大川b式でも4%（230点中9点）である。このように、当地方における密接帯状施文は2~4%に過ぎず、例外的存在である。

これに対して近江の栗津湖底遺跡<sup>10</sup>では、どちらか

判断できる破片の82% (17点中14点)に及んでおり、特に口縁部とは別に体上部にも横位施文帯をもつ例が目立つ。このように、同じく大鼻式期とされる中でも大きな地域差がある事実は注目に値する。

さらに、粟津湖底遺跡における密接帯状施文の盛行後も、同じ近江である蛭谷遺跡の神宮寺式の例等では無文部分をもつ例も知られている。現段階では資料不足だが、無文部分の出現は中部山岳地帯の沢式や壺状式のような無文地への帯状施文の成立を考えるうえで示唆的である<sup>8)</sup>。

そして、中部山岳地帯を中心に無文地帯状施文例が出現すると近畿・東海地方にも類例が散見されだし、次第に異方向施文や内面施文等という新しい要素が加わるようになる<sup>9)</sup>。

尚、小楕では頸部近くの横位文様帯であっても、器形上明らかに体部にあるものは、頸部文様帯ではなくて体部文様帯としている。

## (3) II群(大鼻式)土器

**大鼻式の一般的な特徴** (参照表C～G) 坂倉遺跡出土の大鼻式土器は、大鼻遺跡出土例と共に大鼻式の基準資料としたものである<sup>10)</sup>。但し、伊勢地方では他地域とはやや異なる型式要素も認められる。そこでまずは伊勢地方の大鼻式を確認するため、以下に述べる型式属性には他地方の例を含めない。

大鼻式の基本的な属性としては、口唇に回転縄文、口縁部外面に回転か押圧又は刺突の縄文、体・底部に上からの縦位押型文をもつ。口縁部は厚手で短く、頸部は屈曲と云うより屈折し(外反度56%)、やや薄手の長い体部と乳頭状突起の未発達な尖底をもつ。体・底部の内面には成形時の指頭圧痕を残すが、口縁部内面では強い二次コナダ(出現率100%)によって消されている。縄文は概らく太い原体を強く擦っており、単筋が一般的だが複筋や無筋の例もある。押型文様は、いわゆる「枝回転文」を中心として市松文と格子文があるが、山形文は認められない。縄文と押型文という2種の原体による2・3の施文手法と文様が、口唇部及び口縁部と体・底部に施されている。一部には口・頸部境に区画線状の文様をもつ例もあるが、屈折しているために頸部としての幅をもった文様帯は形成されていない。

一方、口縁部外面に押型文が施された例が坂倉遺

跡や大鼻遺跡からも微量は出土しているが、大川a式として型式分離した。また、大鼻式に特徴的な口縁部内面への強い二次コナダではなく、縄文が施された例も両遺跡から出土しているが、大鼻式としては異質であるためにこれも大鼻式の範疇には含まない。

尚、大鼻・坂倉両遺跡の大鼻式では95% (186点中177点)を占める密接T字施文例と5%の密接帯状施文例があり、上述した属性の内の文様に関しては密接T字施文例の特徴である。これに対して密接帯状施文例では、口縁部に縄文と押型文が併用される場合もあり、2種類の押型文が同一個体に施文される例もある。

そして、以上のような大鼻式という押型文土器の出現をもって早期初頭と位置付けた。

**文様** (参照表D～F) 坂倉遺跡と大鼻遺跡から出土した大鼻式土器の全文様は、縄文が19%で押型文が81%を占める<sup>11)</sup>。無文部を残す例も皆無ではないが、意図的なものかは疑問である。縄文には、回転と非回転の側面押圧や先端刺突がある。西出遺跡の先端刺突文例には、二つ折りした縄を縦に重ねて施こされた通有の例と、横にして施された例がある<sup>12)</sup>。さらに、縄を折らずに広げたループ文、及びループ文と先端刺突文との区別が困難な例もある。口縁部への縄文は、回転手法よりも非回転手法がやや多い。

81%を占める押型文の内訳は、「枝回転文」が62%、市松文が14%、格子文が5%である<sup>13)</sup>。このように当地方の大鼻式には「枝回転文」が最も多く、次に市松文、そして微量の格子文、という傾向が窺える。尚、ここで扱う例数とは、同一文様でも異なる部位に施されている場合は別とする、延べ数である。

原体の平均的な大きさに関しては資料が多くないが、坂倉遺跡では径7.2mm、長さ25.3mmであり、大鼻遺跡では径10.8mm、長さ24.5mmであった。これにより、当地方の大鼻式の押型文原体は、径が7～11mm程で長さが25mm前後として大過あるまい。尚、粟津湖底遺跡では径8.9mm、長さ28.8mmと報告されている<sup>14)</sup>。

**「枝回転文」** (参照表E・F) これまで「枝回転文」に関しては、小枝を原体とする説に従っていた<sup>15)</sup>。そして各々の回文部が「様な形状を呈することから、この回文部は菓柄を折り取った跡、すなわち

葉痕と考えた<sup>9</sup>。さらに、葉痕をそのまま加工せずに原体とした場合と、多少とも加工した場合があり得ると筆者も考え、当報告では凹文部の形状が三角形に近い定型な一群(a)と、ある程度加工された可能性のあるその他(b)に細分した。

一方、葉痕は樹種毎に異なり、樹種同定できることを知った。したがって、原体が落葉樹なら樹種と季節をある程度は特定できるのではないかと、筆者も考えた。そこで植物の専門家に樹種同定をお願いしたところ、植物の小枝が原体とは考えがたい、との指摘を受けた。「枝回転文」の凹文部は葉痕の圧痕とは異なり、凹文部の配列も違い、凹文部相互の間隔も小枝にしては疎ら過ぎる、とのことである。樹種の同定や季節の限定ができるのではないかとという期待が、その前提から覆されたわけである。そこで、植物生態学の立場からの原体に関する研究をお願いし、論文を寄稿していただいたが、結局は別途公表していただくに至った次第である<sup>9</sup>。

布谷論文では、結論的に原体が枝とは考えられないうが、何かまでは特定されていない。そこで、以下では便宜的に括弧付で「枝回転文」と呼んでおく。原体の如何はともかく、「枝回転文」析出の意義は回転押型文であることの指摘にあったと云えよう。

尚、坂倉遺跡の凹文部が未加工で三角形に近いと似た一群(a)とその他(b)には、出土した遺構や層位に有意の違いは認め難かった。

**大鼻式の地域的特徴** 上述のように、伊勢地方の大鼻式には他地方とやや異なる特徴も見られる。その発現の背景には地域性のほかに時間差も考えられるが、ここではその傾向を以下に再度要約しておく。

まず、密接帯状施文の割合が低い。そして、文様の中で縄文の占める割合も低い。さらに、口縁部は厚手だが体・底部は薄く、体・底部が長く深い傾向が強い。

#### (4) 伊勢地方の大川式土器

大川式土器は、坂倉遺跡でも少量ながら出土している。そこで、以下に伊勢地方の大川式の特徴についても触れておくこととする。大川式には密接帯状施文例や口・頸部刺突例があるが、まずは主体をなす密接T字施文例を中心に特徴を再確認しておく。尚、大川式はaとbに2分し、aをさらにa1とa2に細

分した<sup>9</sup>。

**大川a1式**(挿図表C・D・F・G) 口唇部は縄文だが口縁部は押型文と云う例も、当初には大鼻式に含めた。しかし、それでは大鼻式と大川式の区別が口縁部片でも困難なために、これを大川a1式として分離した。該当例は坂倉遺跡(121~125・245)や大鼻遺跡(24)にも認められるが、西出遺跡に比較的好例(2・93・148・292・323・337・492~503・558・932・933)がある。

口縁部の外反度は54%であり、口縁部内面への二次ヨコナデは85%に認められる。

この大川a1式では、口唇縄文と口縁部押型文を特徴とするが、このほかに大鼻式に特徴的な「枝回転文」が消えて市松文が主体となる。また刺突文原体は、大鼻式に特徴的な縄も残るが、大川式に特徴的な丸棒状具が一般化し、一部には口縁部にも施されている。

主体をなす密接T字施文例では、1個体に縄と1種類の押型文という、2原体による回転と刺突が押圧という2・3の施文手法を用いた文様が施され、口唇と口縁部と頸部及び体・底部に文様帯をもつ。

**大川a2式**(挿図表C・D・F・G) 坂倉遺跡から3km弱西にある湧ノ木遺跡の主体をなすものが典型例である。湧ノ木遺跡例の大川a2式では、大川a1式と判断される口唇部縄文の1例を除いた70例が大川a2式である。

口唇部の外反度は50%であり、口縁部内面への二次ヨコナデは65%に認められる。

口唇には、押型文原体らしい棒状具の側面を刺突して刻目文風に施す、平行刺突文<sup>9</sup>と呼ぶ文様が一般化する。口唇部に限らずに全ての部位において縄文が見られなくなる点は、他地方とは異なる。押型文では市松文が主体となる点で大川a1式と変わらない。刺突文は縄が消えて丸棒状具が急増する点が特徴的である。特に、頸部にはほとんどが刺突文である。また、各部位に山形文がわずかながら認められる。但し、この山形文は後半期のように小型ではなく、大型である。

密接帯状施文や後述する口・頸部刺突例のほかに、主体をなす密接T字施文例では、1個体に1種の押型文原体による平行刺突と刺突・回転という3施文



手法を用いた3文様を施し、口唇と口縁部と頸部及び体・底部に文様帯をもつ。

**大川b式** (挿図表C・D・F・G) 板倉遺跡から2km程北東に位置する射原垣内遺跡に典型例が見られる<sup>8)</sup>。射原垣内遺跡の押型文土器249点ほかを悉皆調査した結果、早期の上器の93%が大川b式である。

口縁部は内面二次ヨコナデの確かな例が34%と少なくなると共に外反も44°と弱くなり、器壁は全体にやや薄くなり始める。押型文は、大川a式以来の市松文が崩れた「特殊菱形文」と呼ばれたものや斜格子文、平行四辺形文、あるいはネガ楕円文が主体を占めている。しかし、こうした文様の相違は漸移的で客観的な区分が困難であるため、小稿では仮に「類ネガ楕円文」として一括した。そして、これらはいずれも施文が浅くなり始めており、施文前の加濕工程の簡略化が窺える。また、二次ヨコナデの簡略・省略化傾向も進んでいる。

以上のような定量的変化と共に、口縁部の横位文様帯が2帯になる例や頸部文様に押型文も出現する点は、大川式をa・bに分ける主要な定性的要素である。

主体をなす密接T字施文例では、1個体に1種の押型文原体による平行刺突と刺突や回転という3施文手法を用いた3文様を施し、口唇部のほかに口縁部と頸部及び体・底部に文様帯をもつ。

**口・頸部刺突の大川式** (挿図表D) 前述のような主体をなす密接T字施文例を強調する余り特に言及してこなかったが、大川式には口・頸部を一体的に施文して頸部文様帯が独立しない例も存在する。これを、「口・頸部刺突例」と呼んでおく。但し、口縁部と頸部で刺突方向の違う例は除外して考えるべきであろう。

このような口・頸部刺突例は、大川a式ではまともな資料に恵まれていないが、鴻ノ木遺跡の大川a式では16% (83点中13点) を占めている。又、射原垣内遺跡の大川b式では、口縁部の75% (41点) が押型文で25% (14点) が刺突文であり、頸部では全てが右方向からの刺突文であった。又、このほかに少量の密接帯状施文例も混じっているはずである。したがって、四分の一弱が口・頸部刺突例と推定さ

れる。

一方、平成24 (2012) 年度に発掘調査された野添大辻遺跡の大川式では、44%が口・頸部刺突例という<sup>9)</sup>。但し、これは大川a式から大川b式に及ぶものであり、密接帯状施文例も混入していると考えられる。ともかく、当遺跡は既述の遺跡群のように伊勢平野部ではなく、大和に続く山間部 (奥伊勢) に所在する。したがって口・頸部刺突例は、同じ伊勢地方でも平野部と山間部とではその出現比率に差異があったらしい。

いづれにしても、これらは刺突文に限るものであり、前述のような伊勢地方における大川式の主体をなす密接T字施文例や少数の密接帯状施文例とは区別するべきものである。おそらく、大鼻式に見られる口縁部への刺突手法を、原体を調から棒状具に替えて継承したものであろう。

尚、近畿地方における大川式の新しいものには頸部文様帯の無い例が見られるが、これは通常的口縁部横位刺突文例でのことであって、口・頸部刺突例ではない。おそらく、口縁部の外反が緩くなるに伴う頸部文様帯の消失が先行した事例であり、伊勢地方の口・頸部刺突例とは系譜上分けて考えるべきものであろう。

ともかく、伊勢地方も特に平野部の大川a・b式では、頸部文様帯をもつ密接T字施文例を主体として、密接帯状施文例や口・頸部刺突例も併存している。このような口・頸部刺突例の原体は、大鼻式の口縁部刺突例が縄文であることを前史として、大川a式では丸棒状具、大川b式では鉋状具と変化しており、原体の変化によっても型式区分できる。近畿地方の頸部文様帯の消失例はもちろん、伊勢地方の密接T字施文例と口・頸部刺突例及び密接帯状施文例は、同一型式内でも一定程度分けて考えた方が理解を整理し易く、この型式理解は主体をなす密接T字施文例を基軸として進めることによって正しくできよう。

**地域色の要約** 伊勢地方では、大和の大川遺跡とは異なって遺跡単位で大川式を型式細分できる。そして伊勢地方の大川式は、最後まで頸部文様帯を失わない密接T字施文例を中心に、口・頸部刺突例や密接帯状施文例もある。しかし、口縁部に押型文を

施した例では頭部文様帯を失ったものは認められない。さらに、縄文は他地方より早く大川式には消えている。また、口唇部への刺突文や頸部への刺突文の右方向への偏りは、他地方よりも顕著である。尚、このように明瞭な地域的特色をもつものを「大川式」と呼ぶべきかは、課題として残されている<sup>8)</sup>。

## (5) 石器 (第6表、第17図、写真36・39)

**有舌尖頭器** 有舌尖頭器は、1点(289)が南地点の煙道付炉穴SF7の煙道内から出土した。この調査区からの出土土器は、早期初頭に属する多量の大鼻式を中心として、微量の大川式と前期以降のみである。尚、大鼻式に先行する可能性のある土器群はこの南地点には無く、北地点から微量が出土したのみである。煙道内の出土であることと併せ、この有舌尖頭器は大鼻式期に属する蓋然性が高く、あえて別

な時期とする根拠はない。

先行時期のものが混入したという可能性も理論的には否定し切れないが、前半期の押型土器に伴って出土している複数の事例を直視したい。

**その他** 石鏝の内、いわゆるロケット鏝(290)や三角形鏝(291)は大鼻式期頃に特徴的である。

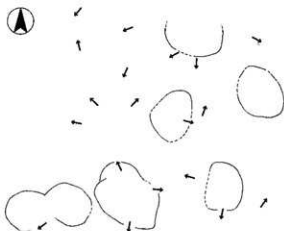
坂倉遺跡の石核や剥片等は、ほとんどがチャートであり、一部にサマカイトや泥岩も見られる。チャートの原石は最寄りの柳田川でも採集できる。一方、サマカイトの最寄りの産地である二上山は、西方約80kmに位置する。そして、やや大型の製品である有舌尖頭器や削器・楔形石器等は地元産のチャートが多用されるが、小型の石鏝には遠隔地産のサマカイトが多用されるという傾向は、大鼻遺跡と共通している。

## 第2節 縄文時代の遺構

### (1) 竪穴住居 (第4～6図)

竪穴住居は8基として報告したところである。但し、この内の3基(SH26～28)は所属期に疑問を残すものであり、竪穴住居であるか自体も不確定である。また、SH122はSH121と大きく重複するために詳細は不明である。それでも、径4m弱の不整の楕円形か円形で床面は舟底状を呈する、という共通点が認められる。竈木穴や柱穴・屋内が・周溝等は確認されていない。

大川式も少量は出土したために一部は大川式期に属する可能性もあるが、出土土器の大部分が属する大鼻式期の所産と考えられる。



挿図表H 坂倉遺跡の煙道付炉穴の位置と方位

これらの竪穴住居は遺跡の最高所に立地しており、そのほとんどが発掘調査地内に含まれていることと、検出事例から削平のために残存しなかったものは見え難いことから、本来の住居跡数のほぼ全てが検出されたと考えられる。そしてその調査結果からは、最多で8基、少なくとも5基は営まれたと推定される。しかし、重複や近接の例も多く、同時存在した竪穴住居はより少なかったはずである。1基か少数の竪穴住居が、遺跡の最高地点に比較的近接して営まれていた様子が窺える。

### (2) 煙道付炉穴 (第7表、第4～6図)

**所屬期ほか** 煙道付炉穴は19基として報告した(挿図表A・H・I)。但し、この内の2基(SF6・12)は不明な点が多い。SF4からは大鼻式土器、煙道の天井部も残存したSF7からは有舌尖頭器、SF17からは大川式土器が出土している。現状では個別の対応関係の確認が困難な資料状況だが、この南調査区の出土遺物は、大鼻式を中心としており、その他は微量の大川式と前期以降の土器のみである。

**規模と形態等**(挿図表A、第7表) 坂倉遺跡のような押型土器の早い時期(大鼻・大川式)の例では、平面形は一方の幅が狭くなった溝状を呈しており、細長い二等辺三角形形状とも云われている<sup>8)</sup>。但

し、中には縦長の台形を呈する例もある。しかし、燃焼坑の平面形はあまり本質的な意味をもつものではない。

煙道付炉穴の形状や規模は全般に削平を受けていることを考慮して残存規模ではなく推定復元を以下に示しておくが、全長は3mを超える例も多く、燃焼坑の長さは1.5m前後で最大幅は1.5m近く、煙道の長さは1～1.3m程、煙出坑の径は0.3～0.4m程と推定される。煙道の横断内面形は横長の長円形であり、最も窄まった部分で幅0.35～0.45m程、高さ0.3～0.35m程である。

燃焼坑の側壁は直角に近く急角度で立ち上がり、端側の傾斜も強い。床面は燃焼坑から煙道前半部に向けて最も深くなり、また煙出坑に向けて浅くなる例が多いようである。しかし、煙出坑に向けて深くなる例もあり、必ずしも一定しない。炎や熱風は床ではなくて天井を這うことを考えれば、天井の縦断面形こそが問題であり、床面の形状はあまり斟酌されなかったであろう。また、煙出坑の床は煙道からそのまま緩やかに連続するのではなく、煙道の床から一段浅くなって煙出坑の底になる事例が多い。これについては、煙出坑と燃焼坑を縦に掘った後に煙道という横穴を掘りだした結果として段差が生じた、という考えもある。但し、このような傾向が全ての煙道付炉穴に共通しているとまで考える必要はなからう。

最深部の深さは、他の遺構の削平状況から数十cmはあったと推定される。焼土化は、煙道の入り口近くを中心に煙道全体や燃焼坑の煙道寄りにも及んでいる。しかし、燃焼坑の端側や煙出坑にはあまり認められない。事実、遺存状態の良い事例では煙出坑は焼土化しておらず、また煙道よりも浅い事例が多い。遺存した幅狭い側の先端を煙出坑と認定しがちだが、ここが焼土化していれば削平された煙道部分である可能性が高く、煙出坑は残存していない蓋然性が高い。

煙道の入り口近くを中心とした付近が最も焼土化している事実から、ここが燃料を置く位置であったと推定される。そして、燃料を置いて焚く場所が低い方が作業をし易いことは、燃焼実験によっても実感された。

**後出的な煙道付炉穴** (挿図表A) 中野山遺跡の煙道付炉穴は、その大部分が板倉遺跡や鴻ノ木遺跡のものよりもやや新しく、押型文土器の中頃のものである。但し、後出的でも基本的に従前の特徴を保っている。

しかし、煙道の短縮化と燃焼坑の小型化の傾向が指摘されている。全長は2m弱で、燃焼坑の長さも幅は数十cm、煙道の長さも数十cmと推定される。

燃焼坑の小型化は、立ち入って作業するための広い燃焼坑から、立ち入らずに外から作業するものに変化した結果ではないか、と実験から考えられた。

また煙道の短縮化は、対象物を煙出坑に置く際に煙道付炉穴の掘削排土を利用し、これを煙突状に立ち上げた結果、煙道を短くしても総長は維持できたことに起因するのではないかと、やはり実験で思われた。

いずれにせよ燃焼坑の短小化や煙道の短縮化は、その機能を損なわない範囲内での掘削作業の合理化が機能向上を目指した結果であろう。

**立地と風向き** (挿図表H～J) 煙道付炉穴は、堅穴住居跡を中心に放射状に並ぶ例がしばしば見られる。いずれも重複例の前後関係が確認不能なために断定できないが、ほとんどが燃焼坑側を重複させている点は注目に値する。また、他の遺跡の煙道付炉穴同士が重複する例も、やはり多くが燃焼坑側を重複させている。さらに、板倉遺跡の重複せずに単独で存在した10基の遺構検出面を見ると、いずれも煙出坑付近よりも燃焼坑付近の方がやや低い。

このように板倉遺跡の煙道付炉穴の燃焼坑は全て低い側に設けた可能性があり、個別の選地にあたっては廃絶した遺構が自然に由来する少しでも低い側に燃焼坑を置いたらしい。これは、相対的に小さくて浅い煙出坑よりも大きくて深い燃焼坑を少しでも低い地点に選地し、掘削作業の省力化を図った結果と推定される。したがって、風向きとは無関係と考えられる。

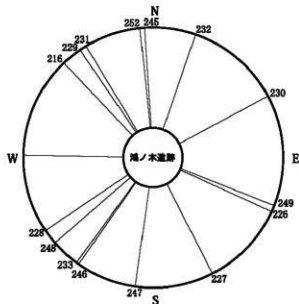
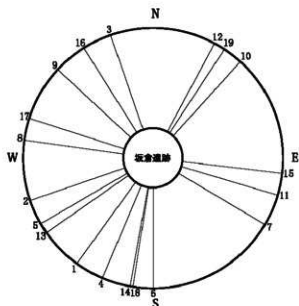
板倉遺跡でも鴻ノ木遺跡でも、煙道付炉穴は斜面ではなくて平坦地に営まれていた。また、煙道付炉穴が百数十基検出された中野山遺跡を始め、そのほかの遺跡でも同様な傾向が窺える。調査のために春以外の季節を通して中野山遺跡の立地する台地に立

ち続けたが、風は台地斜面に当って一旦上空に上るため、斜面近くの台地上は意外に風当たりが弱い。近くの高木の樹冠が風で揺れている時でも、地上はそれ程吹いていないという状況は夏や冬に経験している。まして、伐開された発掘調査時と違って縄文時代は木々が茂っていたであろう。したがって、台地上の風通しはそれほど良くはなかったと思われる。このようにどの方向の斜面でもなくて平坦地に営まれており、風衝地と云うよりもむしろ風背地に近い立地である。こうした傾向からも、煙道付炉穴が風を積極的に利用したものとは考え難い。これは後にも触れるが、煙道付炉穴の焼土化の程度が風を利用した後世の登り窯には程遠いことにも対応していない。

坂倉遺跡と鴻ノ木遺跡では、燃焼坑から煙出坑を見た方角の大半が北西か南西寄りだが、これは冬の季節風を逆風とする向きである。しかも、北東向きや南東向きもあって一定しない。百数十基検出されている中野山遺跡でも、その方位に大きな偏りは認め難い。尚、これらの遺跡には特に風向きを変える程の障害物はない。

それでも、仮に西寄りが多いことを重視したうえで風向きと関係があると考えれば、東寄りの風を利用したか、西寄りの風を避けた場合がやや多かったことになる。また、各方向のものがあることから、各季節に営まれたことになろう。しかし後述するように、煙道付炉穴は短期集中的に営まれたらしく、通年の利用とは考え難い。

煙道付炉穴の本来の深さは、他の遺構の残存状況から数十cmはあったと推定される。そして、煙道の天井部は5・6cm程の厚さまで焼けているが、当時の生活面までは焼上化しない程の深さ、すなわち5・6cm以上の深さに煙道が穿たれていたはずであるが(挿図表A・J)、煙道上が焼土化していない浅さで遺存した煙道付炉穴はほとんどなく、この点からも残存する煙道付炉穴はかなり削平されているものと判断される。また、横穴である煙道の横断内面形は最も窄まった部分でも幅40cm内外、高さ30cm余の長円形であるが、この落盤防止のためには軟らかい表土より下の固い地層をある程度深く掘り抜く必要があり、この必要性が煙道付炉穴を深くした主要



挿図表 I 煙道付炉穴の方位 (燃焼坑から煙出坑を見た方角)



挿図表 J 煙道付炉穴の実験風景 (逆風でも煙出坑から煙が出た)

因になっていたと考えられる。このように深いことは、燃焼坑の壁が急傾斜であることと共に、どの方向からにせよ風を呼び込むには不都合な構造である。

一方、煙道付か穴の焼上化は入り口近くの煙道内を中心としており、この事実は燃焼坑での直火利用が主な利用法ではなかったことを物語っている。また、良く遺存した煙出坑がほとんど焼けていない事実は、煙出坑にまで炎をあまり届けない利用法であり、炎を風で煙出坑にまで積極的に送り込んだものではなかったことを物語っている。そもそも、燃焼坑や煙出坑で直火を利用する施設なら、散えて煙道を設ける意味が無い。

また焼上化の程度は、堅穴住居の一般的な屋内が赤褐色だが、煙道付炉穴では赤褐色に加えて中心部は黄褐色化している。このように屋内炉よりも煙道付炉穴の方がやや進んでいるが、後世の登り窯には遙かに及ばない。その理由は、送風・排煙機能を何ら持たない屋内炉と、排煙機能を持つ煙道付炉穴、送風・排煙機能を持つ登り窯、という違いに起因すると考えられる。

実際に焼成実験をしてみると、向かい風でも追い風でもあまり関係なく煙出坑から十分に煙が昇った(挿図表J)。さらに、深く急傾斜の焼成穴からは、風の流れ込みが少ないことも確認できた。加えて、風向きは刻々と変わるもの、とも実感された。尚、逆風時に煙道の前半部で焚いても炎や煙はかなり自然に煙出坑に向けて流れていったが、これは燃焼によって上昇気流が生じるためらしく、煙道は横穴でも排煙穴としての機能を発揮していた。

加えて、結論的には後述するように煙道付炉穴は

熱風による乾燥施設と推定するが、このためには煙を作った後は燻べる程度の弱火でよく、風を送り込んで火勢を強めることは望ましくない。実際に煙道の奥寄り火勢を強めてみると煙出坑にまで炎が届き、置いた堅果類が驚ごとく焼けてしまった。尚、弱火でも実際の遺構と同程度に焼土化することも実験で確認できた。

以上により、煙道付炉穴は風背地を積極的に選んだとまでは云えないまでも、風衝地を好んで選んだ可能性は高くなさそうである。煙道付か穴は、風を利用したと云うよりも、むしろ避けた傾向さえ窺える。それは、燃焼坑の選地に方位と無関係に窪地が好まれたらしい点や、方位に傾向性が認め難い点、風を呼び込むには深く壁が急角度過ぎる点、焼土の中心が煙道内にある点、焼土化の程度が風を利用した程には進んでいない点、実験で逆風でも煙出坑からは煙が出た点、風を利用しない弱火でも焼土化する点からも首肯される。また、後世の登り窯ならともかく、自身の子供時代の生活体験からしても、むしろ炉一般では風は避けたいものである。

**炉の分類と機能** (挿図表K) 板倉遺跡を始めとして多くの遺跡では当時の生活面が削平されている故であろうが、地上の炉はほとんど検出されていない。ところが、煙道付炉穴のように生活面から掘り込んだかは比較的良く遺存している。以下、各種の炉について盛行期の相違等は置いて便宜的な分類を試みておく。

まず、炉は仮称「地上炉」と「掘込炉」に2大別したい。地上炉には炉床を少々掘り下げる例も含み、遺存例の多くが屋内炉である。ともかく、地上炉は外構の有無や違いによって「地床炉」や「石囲炉」・「埋燻炉」等と細分して呼び分けられている。しかし、いずれも焼く・煮ると共に暖房・照明・保安等という、燻や炎の直火利用施設である。そして、地上炉では土器や土偶等の生活用品の焼成・製作もなされていたであろうが、やはり食料の調理が中心だったであろう。ちなみに、後世の甕は燻を除いて炎の熱気だけを煮る・焼く等に利用しており、分煙という改良はあるが基本的には地上炉の一種である。

一方、地上炉に対しては「掘込炉」とでも呼ぶべき一群があり、掘込炉は「縦型」と「横型」に二分

分類	名称	構造	主な機能・特徴
地上炉	地床炉	外構なし	焼く・煮る、調理用
	石囲炉	外構が石	
	埋燻炉	外構が土器	
掘込炉	竈石炉	竈石を伴う土坑	石薫し焼き、調理用
	土坑炉	石を伴わない土坑	乾燥・燻製 短時間向き、貯蔵用
	煙道付炉穴	土坑を横穴で連結	乾燥・燻製 長時間向き、貯蔵用

挿図表K 炉の分類試案(「地上炉」は3種のみを例示)

したい。そして、縦型は「集石炉」と仮称「上坑か」であり、横型は「煙道付炉穴」である<sup>9</sup>。このように分類・仮称する立場からは、いわゆる「炉穴」とは必ずしも煙道付か穴に限定せずに掘込か全般を指す場合が多いと理解される。

掘込炉の中の縦型の一つである「集石炉」は、東海地方でも九州・関東地方でも草創期から晩期まで存在するが、主として早期に盛行する<sup>9</sup>。三重県内でも大川式期以降の早期の例がほとんどであり、煙道付か穴と共に伴する場合が多い<sup>9</sup>。底部の石組みの有無で2細分できる一方、どの使用段階で廃棄されたかによって石や炭化物の含まれる程度が違う。近江の赤野井湾遺跡の例では、コイやフナのほかに、スッポン・イノシシ等の骨が石や焼土と共に出土しており、日常的な石蒸し焼き施設であったと推定されている<sup>9</sup>。

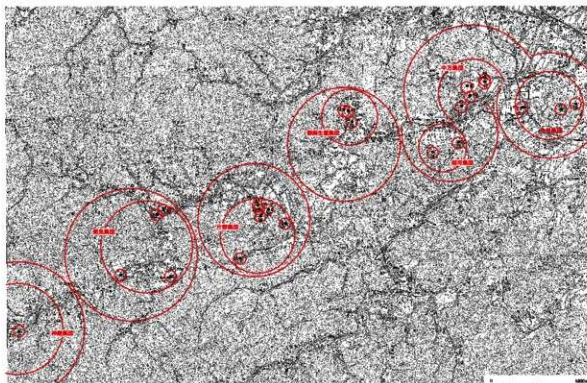
また、掘込炉の縦型でも集石を伴わない例は「土坑炉」と呼んでおく。赤野井湾遺跡の例は、出土した骨からコイの開きを乾燥・燻製して保存食を作った施設と推定されている<sup>9</sup>。現代の漁村でも逆台形の枠の中で小アジを蒸し焼きにしており、原理的に変わらない。

**煙道付炉穴の機能**(挿図表K) 掘込かの内には、横型として「煙道付炉穴」がある。云うまでもなく、燃焼坑と煙出坑を煙道という横穴で連結した炉である。

火勢を強めた実験結果では煙出坑にまで炎が届き、直接に燃焼坑で火に掛けるよりは効率はやがるものの、煙出坑に据えた器の水は80度台まで上がり、煮沸調理ができた。また、燃焼坑や煙出坑での焼く・煮るという作業も可能ではあった。しかし、これらの直火を利用する使用方法では、あえて煙道をもつかを作った理由が説明できない。また、燃焼が入り口近くとは云え煙道内である事実も直火利用には不都合である。やはり、直火利用は付随的な使用方法と云わざるを得ない。地上炉の焼く・煮る、集石炉の蒸し焼きという以外の、煙道付炉穴ならではの本来的な主たる機能が存在したはずである。

結局、あえて煙道を設けている点を重視すると、直火を避けて熱と煙が混じった熱風を煙出坑で活用するためのものと理解される。すると、やはり考えられる利用法としては乾燥及び燻製である。

では、縦型の土坑炉と横に煙道を設けた煙道付炉穴が同じ乾燥・燻製施設であるなら、どのような機



挿図表K 榑田川流域の集石領域 岡十地埋院「本誌」「松風」「丹生」「伊勢」(1:50,000)から。

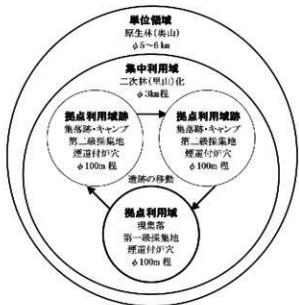
能分担が考えられるであろうか。土坑炉はその構造が縦であることから、燃料の補給・調整が不便である。それ故であろう、1回の燃焼で乾燥・燻製ができる間に火通しを良くしたコイに使われている。現代の例でも小魚が対象である。一方、煙道付炉穴は横穴構造であることから、煙出坑で次々に乾燥・燻製しながら燃焼坑では継続的な燃料補給や調整が容易で、長時間の継続的な作業に適している。したがって、煙道付炉穴は長時間作業により適した施設だったと考えられる。但し、両者に機能上の決定的な相違はなく、文化的に異なる系譜のものが併存していた等の可能性も否定できない。

**熱風乾燥と対象物** (挿図表L・M) 坂倉遺跡では、竪穴住居8基以内に対して煙道付炉穴は19基程が検出された。また、大鼻遺跡では8基に対して16基程、鴻ノ木遺跡では17基に対して21基程と推定されている。台地上の大部分を発掘調査した中野山遺跡の場合に至っては、4基に対して百数十基である。

このように、竪穴住居に対する煙道付炉穴の数は圧倒的に多い例が一般的である。また、煙道付炉穴は竪穴住居程には重複例が多くない。重複例も、廃絶遺構の窪地を利用して造営上の省力化を図った例が多いと推定される。これらの事例から、廃絶遺構が完全に埋没する程の長期間を経ずに次々と営まれた場合が多かったと推定され、煙道付炉穴は短期に集中して多数が造営・利用されたと考えられる。

一方、煙道付炉穴の場合でも地上かや集石か等と同様に、食料以外の生活用品を扱った場合もあったであろう。しかし他種の炉と同様に、やはりその主な対象は食料だったと考えられる。そして、食料には動物質と植物質がある。すでにニワトリの燻製実験の報告例もあるように<sup>9)</sup>、動物質の燻製も当然考えられる。動物質には哺乳類以外にも魚類や両生類・爬虫類・昆虫等も含まれていたはずであり、これらの特に大量捕獲の際には貯蔵に適した乾燥・燻製が大に行なわれたであろう。

しかし、当時の主な食料は、動物質ではなくて植物質だったと考えられている<sup>9)</sup>。藤田川流域では、同一集団が5・6kmの縄張り(単位領域)を持ち、その中のさらに3km程の範囲内(集中利用域)で居住域(拠点利用域)を遺していた様子が見え、このよ



挿図表M 重層的な縄張りと煙道付炉穴

うに狭い範囲で移動していた様子からも、動物を扱う生活が中心だったとは考え難い<sup>9)</sup>。やはり、煙道付炉穴の主な対象物は植物質食料だったであろう。

そして既述のように、煙道付炉穴は長時間の継続的な乾燥・燻製作業に適している。すると、同一食材に長時間を要する場合と、同一種類の食材を煙出坑で次々に交替させて大量処理する場合が想定できる。長時間を要する物とは、硬い大きいか又はその両方である。だが、大量利用したそのような植物質食料は考え難い。一方、同一種類で大量に利用された植物質食料としては、堅果類が考えられる。もちろん、肉類や開いた魚等にも利用された可能性は充分であろう。しかし、大量処理向きの煙道付炉穴を多数必要とした程に大量に利用された食料としては、堅果類の比重がより高かったと考えられる。幸実、ドングリは煙道付炉穴の分布する鹿児島県の東黒土田遺跡を始めとして、草創期から利用されていた<sup>9)</sup>。また、栗津湖底遺跡からは早期のクリやドングリが出土しており、乾燥させたドングリを焼いた証拠という「へそ」(座)も出土している<sup>9)</sup>。さらに、鎌まで目の行き届いた調査では、一般的に煙道付炉穴から少ないながらも出土する遺物として、使用痕のある扁平な川原石がやや目立つ。こうした傾向も、煙道付炉穴と石皿の親和性も堅果類の利用を暗示しているようである<sup>9)</sup>。

煙道付炉穴の分布について旧稿では、草創期に南

九州、早期前半に中部地方、早期後半に関東地方、と黒潮沿いに分布圏が北上した結果、と推定した。そしてその後の資料の増加から、中部地方でも三重県から愛知・岐阜県、長野県へと、時と共に黒潮沿岸から内陸に拡散していった様子も明らかにできてきている。

そして、旧稿では煙道付炉穴の分布は温暖化に伴う「特定の植生の分布と密接に対応」していたと推定したが<sup>9</sup>、現在では「特定の植生」を堅果類と考えている。そして後氷期の温暖化に伴う草創期から早期における堅果類の分布状況としては、イチイガシよりもウバメガシの可能性が高いとのことである<sup>9</sup>。但し、特定の1種に限定して考え過ぎると実態から遊離する恐れがある。

**民俗例** 名久井文明氏の労作は、近・現代の囲が裏のある生活の中での木の実食が丹念に記録され、強い説得力をもって「堅果類が主食になり得た」ことを教えてくれている<sup>9</sup>。

そしてここでは、クリもドングリもその処理法は基本的に変わらない採集・保存・調理の三大工程が紹介されている。民俗例に見る堅果類の保存方法には、短期用の樹上保存と土中保存及び長期用の囲が裏上での乾燥保存があるという。考古学的に樹上保存は検証困難だが、上中保存の例は先にも触れたように草創期から例がある<sup>9</sup>。実際に秋から春まで土中で保存してみると、鮮度は保ち易いが虫害や発芽及び腐植の恐れが感じられた<sup>9</sup>。長期乾燥保存については典型的な「事例1-7」を中心に見ると、ドングリを「秋のうちに都合2石も3石も拾った。7、8人の家族で翌年の秋が来るまで食べるには、それぐらいが必要」という採集工程がある。次には、採集品を軽く煮るか水に漬けて虫殺しをするという保存工程が続く。そして、囲が裏の上の棚に上げて「一晩中火を絶やさぬようにし」、「三日間ぐらいはこのようにして昼夜とも火を絶やさぬ」という乾燥工程がある。その後は囲が裏の上の棚で保存されるために乾燥状態が維持・促進され、菌や虫及び発芽を防いでいる。実際、堅果類は菌易いため、乾燥は保存するうえで重要である<sup>9</sup>。そして、これは長期保存を目的としていることから、保存方法の中でも当然的中心をなしていたであろう。

**縄張り内の分布** (挿図表L) 中野山遺跡では3基だけが孤立して分布する地点があるが、これは居住地からある程度離れた場所ですべて1集団が1季節に営んだ痕跡と理解される。これが云わば基礎単位である。

一般に縄文時代は、一部に栽培技術があったにせよ堅果類を始めとする自然資源の盛衰によって居を遷すという、自然に寄生した生存戦略をとっていたであろう。したがって、居住地の選定には水や日当たり等はもちろんだが、主要な食料である堅果類も重要な選定要素のはずである。云わば、第一級の採集地である。そこで、居住地周辺(拠点利用域)<sup>9</sup>で採集した堅果類は、この煙道付炉穴で乾燥処理したであろう。尚、この場合でも煙道付炉穴は堅穴住居より数多く営まれたであろう。

一方、居住地周辺の堅果類の取量が相対的に低下してくると、より豊かな堅果類の森を求めて「集中利用域」内で居を遷したであろう。しかし、元の居住地周辺でもまだそれなりに採集できたはずである。云わば、第一級から第二級の採集地への格下<sup>9</sup>である。ここでは、キャンプして採集と乾燥作業を行っていたと考えられる。したがって、第一級の採集地である居住地周辺よりも第二級の採集地であった回数が多い程、住居跡に比して煙道付炉穴の累積数が多い遺跡となったはずである。

一方、住居を遷したりキャンプを営む程ではない採集地も当然あったであろう。云わば、第三級の採集地である。この場合は、居住地から直接採集に向き、乾燥作業もせずにそのまま持ち帰ったのであろう。

ちなみに、イチイガシの実験では採集時で1升当たり1,300gだが、これを水に漬けると虫食いや不熟果・腐食果等の著しい不良品を除去できて1,240gが残った。さらに、後述のように煙道付炉穴で乾燥処理すると975gになった<sup>9</sup>。これを7・8人用に2・3石を採集したという上記の民俗例を参考にすると、2石で260kg前後の重さになる。堅果類の採集期間はゾウムシの幼虫や鳥獣等との競争であるために雨天でも採集に出ることもあり(事例1-6)、濡れればさらに重かったであろう。ところが、煙道付炉穴で乾燥実験した結果では上記のように75%程になり、採



集品は選別や乾燥を行ってから持ち帰った方が楽である。全てを居住地付近で処理するよりも分散処理した方が重さを軽減できるだけでなく、燃料確保の点でも合理的である。また、煙道付炉穴からの遺物が少ない傾向も、居住区域外でも営まれた場合が多かったことを示唆している。

**屋内炉と炉上保存** 煙道付炉穴は広範な各期に認められるが、やはり草創期から早期に最も盛行している。一方、屋内炉は縄文前期頃から一般化する<sup>①</sup>。このように、煙道付炉穴と屋内炉は大勢として入れ替わるように盛行している点は注目に値する<sup>②</sup>。

ところで、民俗例のような長期保存としては、堅穴住居内の炉上の屋根裏に堅果類を貯蔵していたと推定できる事例も指摘されている<sup>③</sup>。そこで、囲か裏という屋内炉のある民俗例と屋内炉出現以前の生活とを対比してみたい。すると、民俗例の堅果類を囲か裏の上の棚に上げて3日間ぐらひは昼夜共火を絶やさないと乾燥工程が、屋内炉の普及以前は煙道付炉穴で行なわれていたのではなからうか<sup>④</sup>。そして、屋内炉が出現して民俗例のようになった結果が煙道付炉穴の衰退を促したのではないかと推定される。

このように推定すると、煙道付炉穴の主な機能は焼製もさることながら乾燥がより重要だったと考えられる。焼製技術の成立地が列島の内外かは不明にして知らない。また、煙道付炉穴を使用した縄文人が焼製と乾燥を意識的に区別していたかも明らかではない。しかし、焼製は熱風乾燥による保存処理技術から副次的に派生したもので、焼製品への嗜好もこうした経緯の中で醸成された歴史的産物ではなからうか。

ともかく、煙道付炉穴は主として堅果類を保存用に乾燥させるための施設だったと推定される<sup>⑤</sup>。そし

て、堅果類の煙道付炉穴での乾燥処理と堅穴住居の屋根裏での貯蔵という食料の長期保存技術体系の成立が、定住化への大きな前提と動機になったであろう。

但し、堅果類は搬易いが貯蔵に難しは大敵であり、虫もつき易い。そこで、貯蔵中も焼し続けることでこれらの予防ができる屋内炉の出現は、大量・長期貯蔵にとって非常に有効だったはずである。そしてこの屋内炉は、主柱の採用によって屋根裏が高くなったことを前提として出現たと理解される。また、主柱の採用は屋根裏の収納空間の増大と構造的な強度を増し、それ以前より大きな貯蔵能力を提供したと推定される。先述の実験から乾燥処理した2石のイチイガシで仮定すると200kg近くの重さになり、主柱なしでは屋根裏の強度と収納能力に無理がある。したがって主柱と屋内炉が出現する以前では、徹等のおそれと屋根裏の構造的な脆弱さと狭小さから、保存量は出現以後より相対的に少なかったであろう。それ故、主柱と屋内炉の出現は定住化をより一段と促進した、という意味で重要な両期だったと考えられる。

人類史に限らず広く動物世界には、自然資源の排他的利用による縄張りが見られる。そして、縄張り内での居住には遊動と定住の2形態がある。列島の人類史の場合では、縄文時代になって既述のように食料の長期の保存技術体系が成立し、結果的に縄張り内での定住が促進されたであろう<sup>⑥</sup>。さらにこの定住化には、屋内炉が出現する前後で段階差があったであろう。

このように、煙道付炉穴は定住化を促進した要因となり、定住化の初期段階から屋内炉の出現までに盛行した、堅果類の乾燥処理施設だったと考えられる。

## 〔註〕

①下記の文献ほかを参考とす。  
 ② 泉茂次「多摩川の沿岸部・縄文遺跡」(『多摩町史』多摩町、1992年)。  
 ③ a 橋本繁・村田誠「一般国道1号亀山ハイパス掘削文化財発掘調査報告書 Ⅲ 大森(二〜三次)・山城(二次)遺跡」(三重県教育委員会、1987年)。  
 b 山本隆ほか「大森遺跡発掘調査報告書」(三重県教育委員会、1994年)。  
 ④ a 村田誠「縄文土器群の形式学的考察―三重県下の前半期を中心として―」(『土器文化研究』第4号、三重県、1985年)。  
 b 田村隆・山本隆ほか「浦ノ木遺跡(下層部)」(三重県発掘文化財センター、1993年)。  
 ⑤ 村田誠のaの文献に同じ。但し「焼炊窯」を「焼製焼炊窯」と呼び替えた。  
 ⑥ 山本隆「大森式・大川式の再検討」(『研究紀要』第2号、三重県発掘文化財センター、1993年)。  
 ⑦ 岩谷和典「縄文土器のいわゆる炊飯器について」(『His history』vol.28、三重県文化研究会、2001年)。  
 ⑧ 『縄文館』が下記の文献で引用されるまでは、市販文に含めていた。

矢野博「縄文土器の形態と発掘に関する新視点」(『研究紀要』第2号、三重県発掘文化財センター、1993年)。  
 ⑨ 岡田一ほか「輪山遺跡」(奈良県立橿原考古学研究所、2006年)。  
 ⑩ 徳田の山宮遺跡例(1)は口縁部の断面形状が異なり、外面に押型文という集約的な装飾等が見える。また、伊勢地方とは地理的にも離れている。以上の点から、同じく口縁部内部に縄文をもつては、同列に属することは懸念されたい。  
 ⑪ 山口弘「山宮遺跡」(高塚結城教育委員会、1998年)。  
 ⑫ 岩谷和典のbの1〜3は註⑧のb、4は下記のb、5は下記のbの文献から引用した。  
 a 吉田英樹・藤原英樹『塚原遺跡・塚原古墳群』(奈良県教育委員会、1989年)。  
 b 浦定「伊勢国山崎貝塚発掘調査報告書」(『考古学』第10巻7号、1937年)。  
 ⑬ ちなみに、「石平型」と呼ばれる、河の掘削下流を遺跡例(39)1233<sup>⑬</sup>であり、神宮寺式部墓の墓誌に収まる。



番号	種別	文種	通称	製作・調整	注意	色調	備考
1-02-01	1	1	1	1	1	1	1
7-14-01	1	1	1	1	1	1	1
3-06-03	5	1	1	1	1	1	1
4-13-06	8	1	1	1	1	1	1
3-15-09	6	1	1	1	1	1	1
6-03-01	7	1	1	1	1	1	1
7-13-05	1	1	1	1	1	1	1
8-02-04	3	1	1	1	1	1	1
9-01-01	1	1	1	1	1	1	1
10-21-06	1	1	1	1	1	1	1
11-20-02	1	1	1	1	1	1	1
12-21-12	1	1	1	1	1	1	1
13-11-10	1	1	1	1	1	1	1
14-03-23	1	1	1	1	1	1	1
15-23-03	1	1	1	1	1	1	1
16-02-21	1	1	1	1	1	1	1
17-06-09	11	1	1	1	1	1	1
18-01-16	1	1	1	1	1	1	1
19-10-13	1	1	1	1	1	1	1
20-13-04	1	1	1	1	1	1	1
21-09-18	1	1	1	1	1	1	1
22-12-06	1	1	1	1	1	1	1
23-10-01	24	1	1	1	1	1	1
24-07-06	11	1	1	1	1	1	1
25-12-03	14	1	1	1	1	1	1
26-06-11	23	1	1	1	1	1	1
27-13-05	30	1	1	1	1	1	1
28-20-01	1	1	1	1	1	1	1
29-10-31	31	1	1	1	1	1	1
30-03-04	1	1	1	1	1	1	1
31-09-09	39	1	1	1	1	1	1
32-02-04	29	1	1	1	1	1	1
33-12-18	33	1	1	1	1	1	1
34-20-05	33	1	1	1	1	1	1
35-20-06	33	1	1	1	1	1	1
36-20-11	33	1	1	1	1	1	1
37-08-30	33	1	1	1	1	1	1
38-09-04	42	1	1	1	1	1	1
39-16-13	33	1	1	1	1	1	1
40-21-03	33	1	1	1	1	1	1
41-21-08	33	1	1	1	1	1	1
42-21-07	33	1	1	1	1	1	1
43-21-02	33	1	1	1	1	1	1
44-21-01	33	1	1	1	1	1	1
45-21-03	33	1	1	1	1	1	1
46-01-25	33	1	1	1	1	1	1
47-10-02	30	1	1	1	1	1	1
48-14-02	30	1	1	1	1	1	1
49-19-27	33	1	1	1	1	1	1
50-13-02	32	1	1	1	1	1	1
51-21-11	33	1	1	1	1	1	1
52-22-07	33	1	1	1	1	1	1
53-22-04	33	1	1	1	1	1	1
54-04-03	32	1	1	1	1	1	1
55-22-02	33	1	1	1	1	1	1
56-22-04	33	1	1	1	1	1	1
57-09-11	43	1	1	1	1	1	1
58-08-10	44	1	1	1	1	1	1
59-22-10	33	1	1	1	1	1	1
60-23-03	33	1	1	1	1	1	1
61-09-20	34	1	1	1	1	1	1
62-06-01	45	1	1	1	1	1	1
63-06-08	35	1	1	1	1	1	1
64-20-10	33	1	1	1	1	1	1
65-20-17	33	1	1	1	1	1	1
66-21-09	33	1	1	1	1	1	1
67-01-04	34	1	1	1	1	1	1
68-20-04	33	1	1	1	1	1	1
69-08-10	43	1	1	1	1	1	1
70-11-05	32	1	1	1	1	1	1
71-09-02	33	1	1	1	1	1	1
72-10-02	33	1	1	1	1	1	1
73-10-05	38	1	1	1	1	1	1

第1表 北地点出土縄文土器等観察表(1) (番号)欄中の「日」は打丸森遺跡での番号、斜字体は多気町史での番号、空欄は初出

番号	群	文種	遺物カテゴリー	制作・調査方法等	色調	備考
74 22-09	群	佐賀文書	24-1	焼土片、佐賀文書を綴じた文書、土曜は鎌倉	茶褐色	
75 22-12	群	佐賀文書	25-1	焼土片、佐賀文書を綴じた文書、土曜は鎌倉	茶褐色	内面に彩色物
76 03-31	群	佐賀文書 織文	24-1	焼土片、右21枚は佐賀文書を綴じた文書、右17枚は織文の巻物体片を綴じた文書(19)綴文	茶褐色	経緯書綴文文例
77 09-06	群	佐賀文書	25-1	焼土片、佐賀文書を綴じた文書	焼褐色	
78 22-06	群	佐賀文書	22-1	焼土片、佐賀文書を綴じた文書	茶褐色	
79 22-14	群	佐賀文書	25-1	焼土片、佐賀文書を綴じた文書	焼土色	
80 21-10	群	佐賀文書	23-1	焼褐色土	焼褐色	
81 03-04	群	佐賀文書	24-1	厚手の焼土片、厚さ約2mm(長さ約3.5mm)を綴じた文書、内面に彩色物	焼褐色	
82 22-12	群	佐賀文書	25-1	焼土片、佐賀文書を綴じた文書	茶褐色	
83 03-03	群	佐賀文書	23-1	土曜	茶褐色	
84 22-15	群	佐賀文書	25-1	焼土片、佐賀文書を綴じた文書	焼土色	
85 09-06	群	佐賀文書	23-1	土曜	灰褐色	
86 17-01	群	佐賀文書	24-1	焼土片、佐賀文書を綴じた(7)綴文、土曜は鎌倉	茶褐色	当区の同群からは土曜文書のみ出土
87 09-08	群	佐賀文書	25-1	焼土片、土曜は鎌倉	焼褐色	土曜文書を綴じた文書の土曜文書
88 22-05	群	佐賀文書	22-1	焼褐色土	焼土色	
89 03-04	群	佐賀文書 織文	24-1	土曜	茶褐色	経緯書綴文文例、口縁 22.5x5.6mm
90 14-03	群	佐賀文書	23-1	焼褐色土	焼褐色	
91 14-05	群	佐賀文書	22-1	土曜	焼褐色	多量貯蔵
92 17-02	群	佐賀文書	26-1	焼土片、佐賀文書を綴じた文書	焼土色	焼成後穿孔、多量貯蔵
93 07-10	群	佐賀文書	24-1	焼土片、佐賀文書を綴じた文書、土曜は鎌倉	茶褐色	
94 20-12	群	佐賀文書	24-1	焼土片、佐賀文書を綴じた文書	焼褐色	
95 20-09	群	佐賀文書	22-1	焼褐色土	焼褐色	
96 21-12	群	佐賀文書	24-1	焼土片、佐賀文書を綴じた文書、土曜は鎌倉	茶褐色	
97 17-06	群	佐賀文書	26-1	焼土片、佐賀文書を綴じた文書	茶褐色	
98 10-11	群	佐賀文書	24-1	焼土片、佐賀文書を綴じた文書、土曜は鎌倉	茶褐色	
99 10-01	群	佐賀文書	24-1	焼土片、佐賀文書を綴じた文書、内面にナメテテ、土曜は鎌倉	茶褐色	口縁1.5mm 一回縁
100 22-14	群	佐賀文書	26-1	焼土片、佐賀文書を綴じた文書	茶褐色	
101 10-01	群	佐賀文書	24-1	焼土片、佐賀文書を綴じた文書、内面にナメテテ、土曜は鎌倉	茶褐色	9x2.5mm一回縁
102 09-02	群	佐賀文書	25-1	土曜	焼褐色	
103 10-09	群	佐賀文書	23-1	焼土片、佐賀文書を綴じた文書、内面にナメテテ	茶褐色	
104 20-14	群	佐賀文書	24-1	焼土片、佐賀文書を綴じた文書、土曜は鎌倉	焼褐色	
105 10-02	群	正徳子文	20-1	土曜	茶褐色	焼成穴、両縁から、当該群からは正徳子文書が出土
106 11-01	群	正徳子文	24-1	焼土片、正徳子文(厚さは2mm以上)を綴じた文書、内面にナメテテ、土曜は鎌倉	灰褐色	
107 12-05	群	正徳子文	24-1	焼土片、正徳子文を綴じた文書	焼褐色	
108 21-11	群	正徳子文 織文	23-1	焼褐色土	茶褐色	
109 01-05	群	正徳子文 織文	26-1	土曜	茶褐色	経緯文(厚さは約1mm)の綴文を綴じた(7)綴文、口縁には厚手の正徳子文を綴じた文書、綴文内面にナメテテ、土曜は鎌倉
110 09-01	群	正徳子文	20-1	土曜	茶褐色	厚手の焼土片、縦向き綴文の正徳子文と土曜文書の、内面に彩色物ナメテテ
111 20-08	群	正徳子文	22-1	焼褐色土	茶褐色	
112 10-12	群	正徳子文	22-1	焼褐色土	焼土色	
113 10-20	群	正徳子文	24-1	焼土片、正徳子文を綴じた文書	茶褐色	
114 09-07	群	正徳子文	25-1	土曜	茶褐色	当区の同群からは正徳子文書が出土
115 09-06	群	正徳子文	23-1	土曜	茶褐色	
116 20-07	群	正徳子文	22-1	焼褐色土	茶褐色	
117 22-08	群	正徳子文	22-1	焼褐色土	茶褐色	当区の同群からは土曜文書のみ出土
118 03-01	群	正徳子文 織文	24-1	土曜	茶褐色	口縁一回縁、口縁には厚手の正徳子文、土曜文書を綴じた(7)綴文、土曜は鎌倉
119 09-01	群	正徳子文	25-1	土曜	茶褐色	口縁一回縁、口縁には厚手の正徳子文、土曜文書を綴じた(7)綴文、土曜は鎌倉
120 09-05	群	正徳子文 織文	25-1	焼土片、正徳子文を綴じた文書、内面に彩色物ナメテテ、以下に焼成穴を穿孔して厚手の焼土片の正徳子文を綴じた文書、内面に一回縁	茶褐色	
121 01-05	群	佐賀文書 織文	23-1	焼土片、佐賀文書を綴じた文書、土曜は鎌倉	焼褐色	経緯書綴文文例、多量貯蔵
122 03-07	群	佐賀文書 織文	24-1	土曜	茶褐色	口縁一回縁、口縁には厚手の正徳子文、厚手の焼土片を綴じた(7)綴文、土曜は鎌倉
123 01-10	群	佐賀文書 織文	17-1	土曜	茶褐色	口縁一回縁、口縁には厚手の正徳子文、厚手の焼土片を綴じた(7)綴文、土曜は鎌倉
124 09-07	群	佐賀文書 織文	23-1	焼褐色土	茶褐色	口縁一回縁、口縁には厚手の正徳子文、厚手の焼土片を綴じた(7)綴文、土曜は鎌倉
125 04-02	群	佐賀文書 織文	24-1	焼土片、佐賀文書を綴じた文書、内面にナメテテ、土曜は鎌倉	茶褐色	厚さは7.5mm
126 01-03	群	和文 行状文書	23-1	焼褐色土	茶褐色	口縁一回縁、口縁には厚手の正徳子文、厚手の焼土片を綴じた(7)綴文、土曜は鎌倉
127 10-06	群	和文 行状文書	24-1	焼土片、和文(厚さは約1mm)を綴じた文書、内面にナメテテ、土曜は鎌倉	焼褐色	経緯書綴文文例
128 22-04	群	和文 行状文書	24-1	焼土片、和文(厚さは約1mm)を綴じた文書、内面にナメテテ、土曜は鎌倉	茶褐色	
129 20-06	群	和文 行状文書	20-1	土曜	茶褐色	厚手の焼土片、縦向き綴文と土曜文書
130	群	和文 行状文書	20-1	土曜	茶褐色	厚手の焼土片、縦向き綴文と土曜文書
131 22-06	群	和文 行状文書	20-1	土曜	茶褐色	厚手の焼土片、縦向き綴文と土曜文書
132	群	和文 行状文書	20-1	土曜	茶褐色	厚手の焼土片、縦向き綴文と土曜文書
133 22-06	群	和文 行状文書	20-1	土曜	茶褐色	厚手の焼土片、縦向き綴文と土曜文書
134 20-05	群	和文 行状文書	18-1	土曜	茶褐色	厚手の焼土片、縦向き綴文と土曜文書
135 20-07	群	和文 行状文書	18-1	土曜	茶褐色	厚手の焼土片、縦向き綴文と土曜文書
136 20-02	群	和文 行状文書	24-1	土曜	茶褐色	厚手の焼土片、縦向き綴文と土曜文書
137 20-09	群	和文 行状文書	20-1	土曜	茶褐色	厚手の焼土片、縦向き綴文と土曜文書
138 22-07	群	和文 行状文書	24-1	土曜	茶褐色	厚手の焼土片、縦向き綴文と土曜文書
139 21-13	群	和文 行状文書	22-1	土曜	茶褐色	厚手の焼土片、縦向き綴文と土曜文書
140 22-05	群	和文 行状文書	24-1	土曜	茶褐色	厚手の焼土片、縦向き綴文と土曜文書
141	群	和文 行状文書	24-1	土曜	茶褐色	厚手の焼土片、縦向き綴文と土曜文書
142	群	和文 行状文書	24-1	土曜	茶褐色	厚手の焼土片、縦向き綴文と土曜文書
143 22-07	群	和文 行状文書	24-1	土曜	茶褐色	厚手の焼土片、縦向き綴文と土曜文書
144 22-11	群	和文 行状文書	22-1	土曜	茶褐色	厚手の焼土片、縦向き綴文と土曜文書

第2表 北地点出土縄文土器等観察表(2)「番号」欄中の「群」は大森遺跡での番号、但し斜体字は「多気町史」での番号、空欄は未出



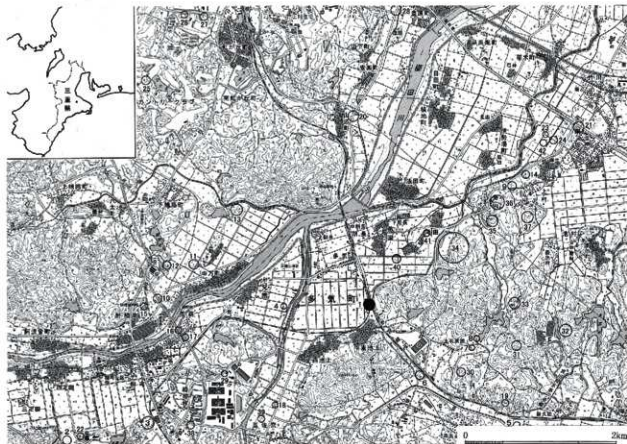


番号	報告	整理	器種	遺物力一ド		法量 (mm)			重量(g)	石材	備考
				地区	遺構・土層	最大長	最大幅	最大厚			
289			有古尖頭器			45	18	6.5		チヤート	SF7煙道内出土、町史№1
290	038-04		石鍬			18.0	8.0	22.0	0.17	チヤート	南地点個人採集、町史№2
291	038-03		石鍬			13.5	8.0	2.7	0.23	チヤート	南地点個人採集、町史№5
292	038-02		石鍬			14.0	10.0	3.0	0.35	チヤート	南地点個人採集、町史№3
293	038-01		石鍬			12.0	14.5	2.5	0.48	チヤート	北地点個人採集、町史№4
294			石鍬							チヤート	北地点個人採集、町史№6
295	031-02		石鍬未成品	南 18-J	褐色土	24.5	23.5	4.0	2.19	チヤート	成はRF5か
296	033-01		削器	南 21-I		43.0	36.0	10.0	14.56	チヤート	町史№7
297	034-02		削器	南 26-I	褐色土下部	40.5	44.0	9.0	18.14	チヤート	
298	032-04		楔形石器	南 25-I	褐色土	23.0	22.0	7.0	4.37	チヤート	
299	030-03		UF	南 21-J	褐色土	26.5	27.0	0.45	3.98	チヤート	
300	029-02		UF	南 H-22	黒褐色土	52.0	31.0	7.0	11.74	泥岩	
301	029-03		UF	南 25-J	褐色土	36.0	27.0	7.5	7.22	チヤート	
302	030-02		UF	南 22-H	褐色土	22.0	24.5	5.5	2.16	チヤート	
303	034-01		UF	北 8-J	褐色土	75.5	34.5	17.0	35.38	チヤート	
304	031-01		RF	南 21-I		43.0	36.5	15.0	21.55	チヤート	
305	030-04		UF	南 23-J	褐色土	40.5	40.0	9.0	12.40	チヤート	
306	030-01		UF	南 23-H	黒褐色土	31.0	44.0	8.5	9.56	チヤート	
307	032-01		F	南 13-R	土坑	52.0	35.0	15.0	19.08	泥岩	
308	031-04		F	南 26-I	褐色土	26.0	42.0	9.5	5.53	チヤート	
309	031-03		F	南 21-I		26.5	19.0	9.0	4.59	チヤート	
310	032-02		F	南 26-I	褐色土下部	27.5	37.0	5.0	4.88	チヤート	
311	032-03		F	南 22-H	褐色土下部	22.5	37.0	7.5	5.26	チヤート	
312	036-01		石核	南 17-J	褐色土	61.0	71.0	43.0	220.64	チヤート	
313	037-01		石核			110.5	70.0	47.5	360.00	チヤート	南地点採集
314	029-01		石剣	南 21-I	土坑	161.5	32.5	24.5	184.17	緑色片岩	町史№60

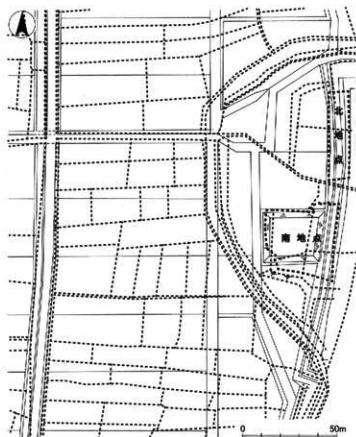
第 6 表 石器観察表

遺構名	方位	全長 (cm)	燃焼坑 (cm)		煙道 (cm)			煙道坑 (cm)		最深部 (cm)		焼土部位
			長さ	最大幅	長さ	最小幅	最小高	長さ	最大幅	位置	深さ	
SF1	N-144°-W	124		75	20 (80~)	36	18	15	52	煙道の前半	26	煙道の天井
SF2	N-109°-W	256		88		44				煙道部の前半	25	煙道部の奥壁
SF3	N-19°-W	186		120	(90~)					煙道の中央	36	煙道の壁
SF4	N-157°-W	228		92					35	燃焼坑	46	
SF5	N-120°-W	142		88	(~100)	35		15	52	煙道部	23	煙道部の壁
SF6	N-180°-S	145								煙道部	17	
SF7	N-121°-E	238		88	52 (80~)	35	22 (35)		40	煙道の前半	28	煙道の壁
SF8	N-82°-W	228	(95~)	100	110 (110)	36	20 (25)	(40)	40	煙道の奥半	36	煙道の壁・床
SF9	N-47°-W	220	(80~)	86	90			(50)	40	煙道の奥半	15	煙道の壁・床
SF10	N-42°-E	152							35	煙道の奥半	30	
SF11	N-107°-E	168		90					40	煙道部の前半	31	煙道部の壁
SF12	N-28°-E	180		118	(70~)						14	
SF13	N-145°-W	246	(155~)	82		42	28 (30)	(40)	40	煙道の前半	25	煙道の壁・床
SF14	N-170°-W	160	(35~)	84	110 (110)	43	26 (33)	25	40	煙道の前半	25	煙道の壁・床
SF15	N-97°-E	150	(70~)	80	65	27	22	30	30	煙道	40	煙道の壁・天井
SF16	N-32°-W	117			72					煙道の前半	24	煙道の壁
SF17	N-72°-W	161			127	40	26 (40)	(40)	35	煙道の前半	25	煙道の壁・床
SF18	N-171°-W	186			(~103)			26	40	煙道の前半	15	煙道の壁
SF19	N-33°-E	180	100	86	52			22	15	煙道の奥半	34	煙道の壁
推定復元		~300	~150	~150	110 ~130	35 ~45	30 ~35	30 ~40	30 ~50	煙道(前半)	80~	煙道

第 7 表 煙道付炉穴の残存値・推定値等一覧表 (括弧数字は推定値、方位は燃焼坑から煙道坑を見た方向)



第1図 位置図 1/50,000(国土地理院「松版」1/25,000より)

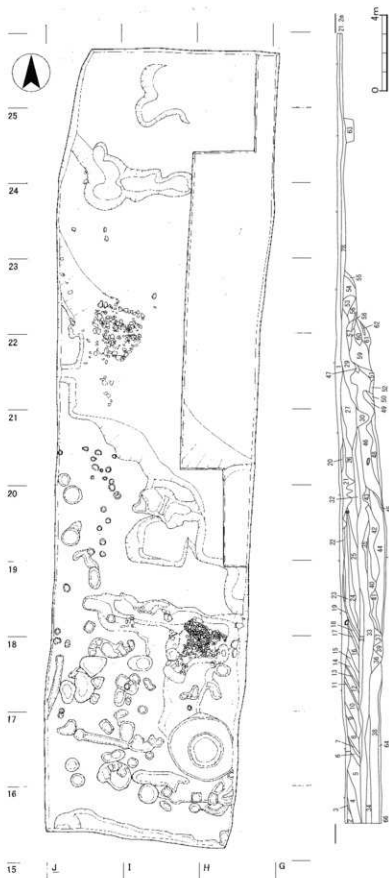


第2図 地形図 1/2,000

№	遺跡名	主な遺構・遺物
1	厩倉遺跡	縄文早期の船穴住居・焼土付土器、埴輪文土器
2	高島遺跡	縄文早期の石器群、早期縄文土器
3	舟山遺跡	縄文早期の石器群、早期縄文土器
4	上タコ遺跡	有古土器群
5	保ノ川遺跡	有古土器群
6	平林遺跡	ナイン形石器・木簡形土器群
7	三川遺跡	ナイン形石器
8	上村池内遺跡	船石
9	コノ入遺跡	ナイン形石器・木簡形土器群・有古土器群
10	鴨ノ木遺跡	縄文早期の船穴住居・保土付土器、埴輪文土器
11	上中遺跡	ナイン形石器、和製文土器
12	鹿島遺跡	和製文土器
13	針原池内遺跡	和製文土器、中世の器や柱礎物
14	コノノ遺跡	和製文土器、埴輪土器
15	下宮前A・B遺跡	和製土器
16	新堂寺遺跡	和製文土器
17	上ノ沼外遺跡	和製土器・大塚
18	田中池内遺跡	和製土器
19	マイク遺跡	大塚有跡石器
20	山崎遺跡	縄文前期土器
21	金刺池遺跡	和製土器、和製文土器
22	(仮)御前山土器	
23	寺池内遺跡	弥生の船穴住居・方形瓦葺儀・ハレススタイル造
24	神船遺跡	弥生の船穴住居・方形瓦葺儀・船礎石
25	高野・広古遺跡	船穴後円墳・円墳
26	防山古墳群	円墳、埴輪
27	高野古墳群	円墳、船礎石
28	神中寺遺跡	古墳の船穴住居、奈良・平安の船穴住居
29	石塚古墳群	円墳、船礎石
30	権見山古墳群	方墳、石室小塚
31	ユヰミ古墳群	2号住居方墳
32	菅原古墳群	1号住居方墳
33	高野古墳群	1号住居立石式
34	河田古墳群	約100基、神子古墳石室
35	大塚古墳群	1号住居立石式
36	神船山古墳群	1号住居立石式、和文書神船
37	天工山古墳群	6号住居方墳
38	明瓦屋敷群	古墳時代後期の板瓦葺儀
39	江古池遺跡	奈良～平安の方墳・塚
40	カウジン遺跡	奈良～平安の船穴住居・井戸、古車・土倉・樽倉土器
41	東宮遺跡	奈良～平安の船穴住居物、円筒瓦・緑釉瓦片・漆器土器
42	川原口遺跡	奈良の土器後成坑、船穴住居

第8表 周辺の主な遺跡



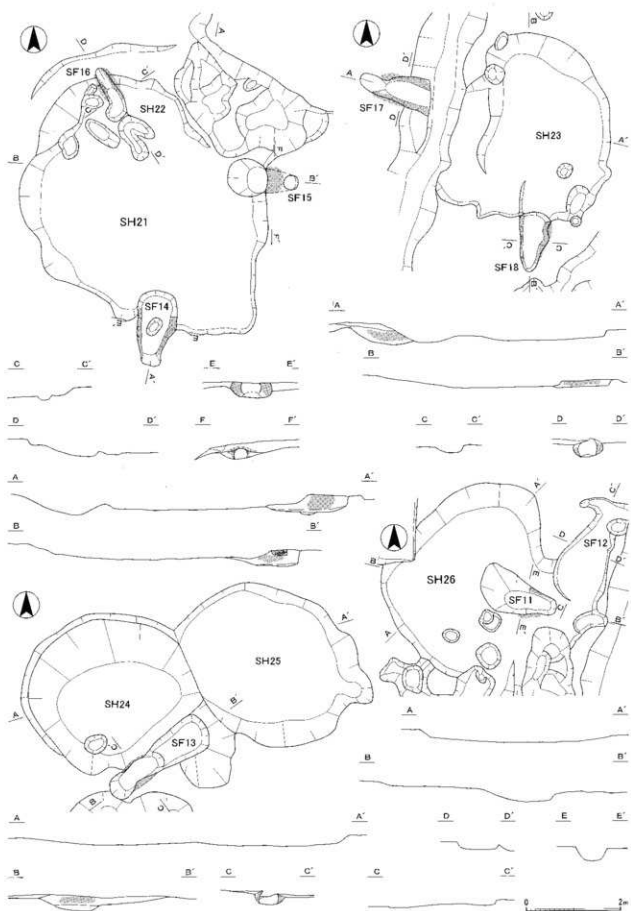


- |                 |                       |                       |                     |
|-----------------|-----------------------|-----------------------|---------------------|
| 1. 赤土           | 23. 小礫混入暗褐色土          | 34. 暗茶褐色土             | 56. 暗茶褐色土           |
| 2. 茶褐色土(甲世遺物出露) | 24. 小礫混入暗褐色土          | 35. (遺物は「褐色土」として取り上げ) | 57. 小礫混入黒色土         |
| 3. 褐色土          | 25. 小礫混入暗茶褐色土         | 36. (遺物は「褐色土」として取り上げ) | 58. 小礫混入暗褐色土        |
| 4. 黄色土          | 26. 暗黄褐色土             | 37. 赤白褐色土             | 59. 小礫混入暗褐色土        |
| 5. 暗茶褐色砂質土      | 27. 小礫混入暗茶褐色土         | 38. 黒色土               | 60. 茶褐色土            |
| 6. 小礫混入暗褐色土     | 28. 暗褐色土              | 39. 黒色土               | 61. 黒色土             |
| 7. 小礫混入暗褐色土     | 29. 暗褐色土              | 40. 黒色土(埋入暗茶褐色土)      | 62. 小礫混入暗褐色土        |
| 8. 小礫混入暗褐色土     | 30. 茶褐色土              | 41. 黒色土               | 63. 暗褐色土            |
| 9. 小礫混入暗褐色土     | 31. 暗茶褐色土             | 42. 暗褐色土              | 64. 暗褐色土(地山の付いた茶褐色) |
| 10. 小礫混入暗褐色土    | 32. 黄褐色土              | 43. 暗褐色土              | 65. 暗褐色土(地山の付いた茶褐色) |
| 11. 暗褐色土        | 33. (遺物は「褐色土」として取り上げ) | 44. 暗褐色土              | 66. 黄白砂礫土(埋入)       |

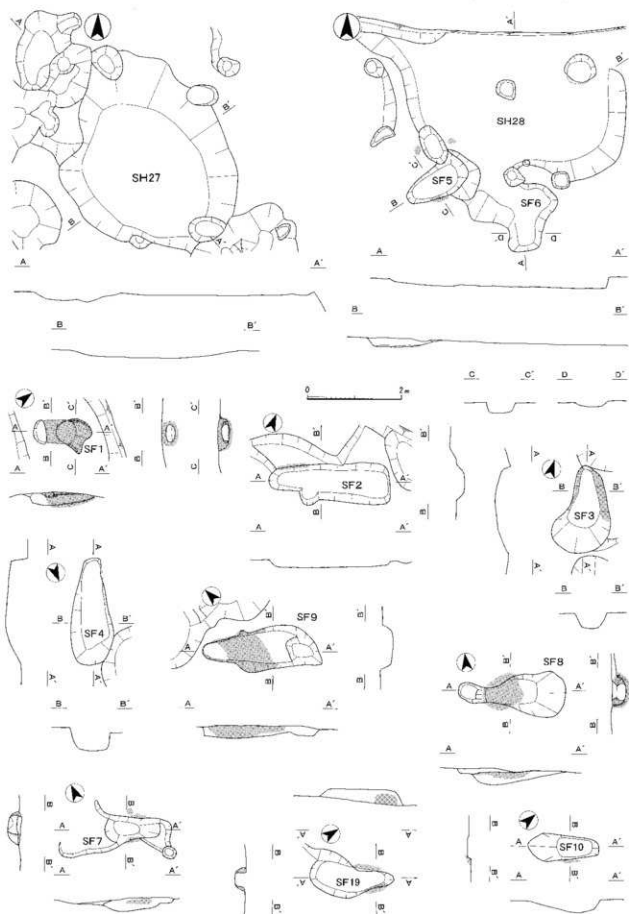
第3図 北地点平面・土層図 1/200(L=21.50m)



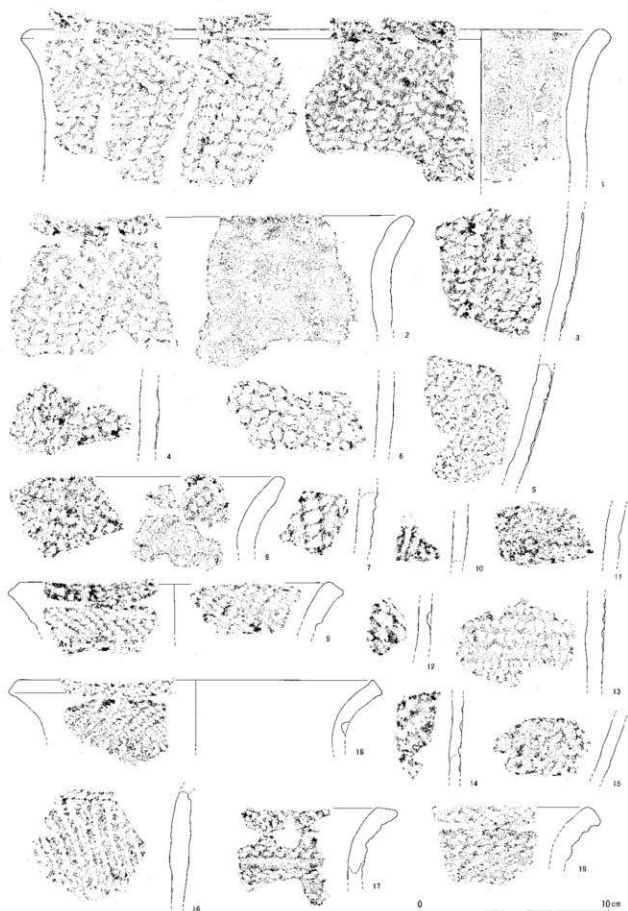
第4图 南地点平面图 1/250



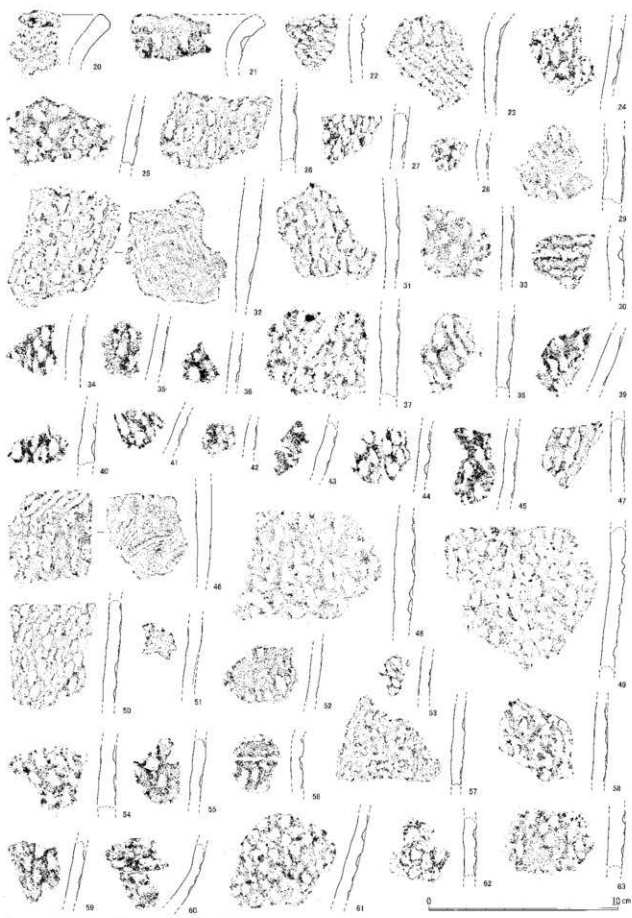
第5圖 SH21~26・SF11~18実測圖 1/800. = 23.800m



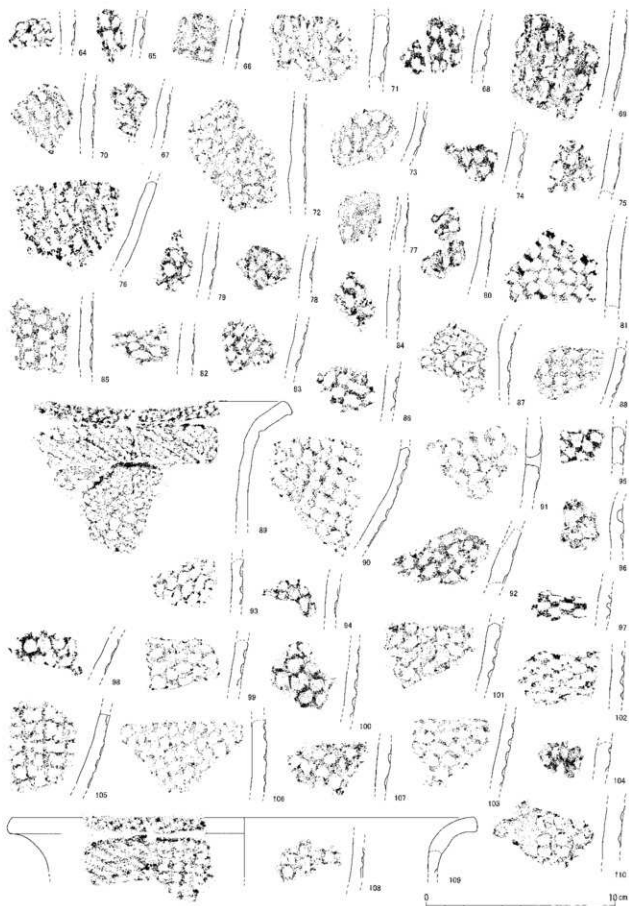
第6图 SH27·28, SF1~10·19实测图 1/80(L=23.800m)



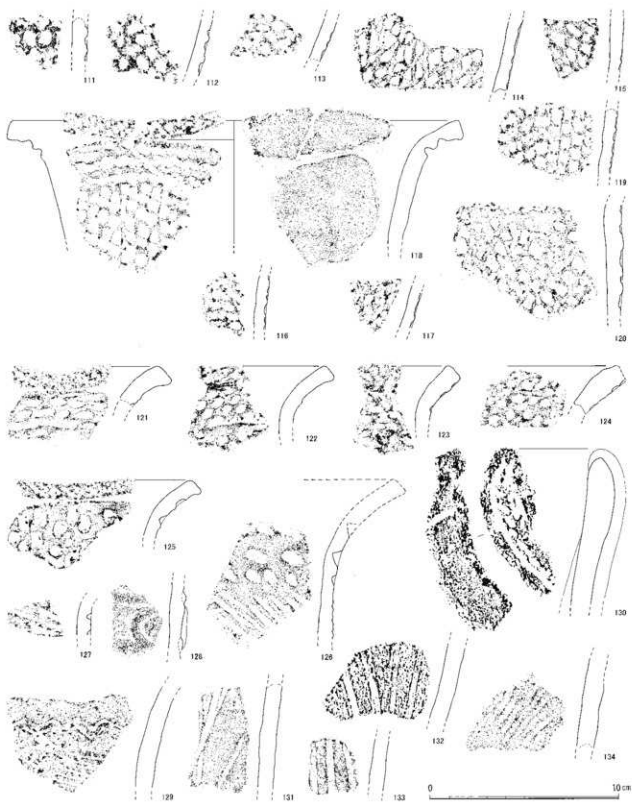
第7圖 北地点出土縄文土器等実測圖 (1) 1/2



第8圖 北地点出土縄文土器等実測図(2) 1/2

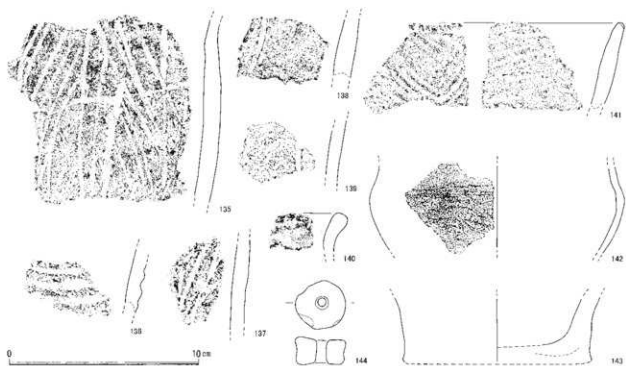


第9图 北地点出土绳文土器等实测图(3) 1/2

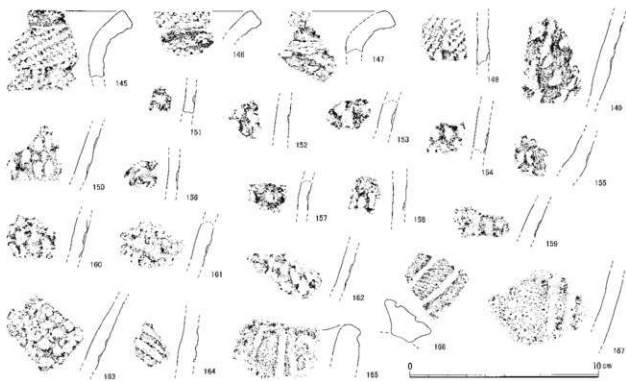


第 10 圖 北地点出土縄文土器等実測圖 (4) 1/2

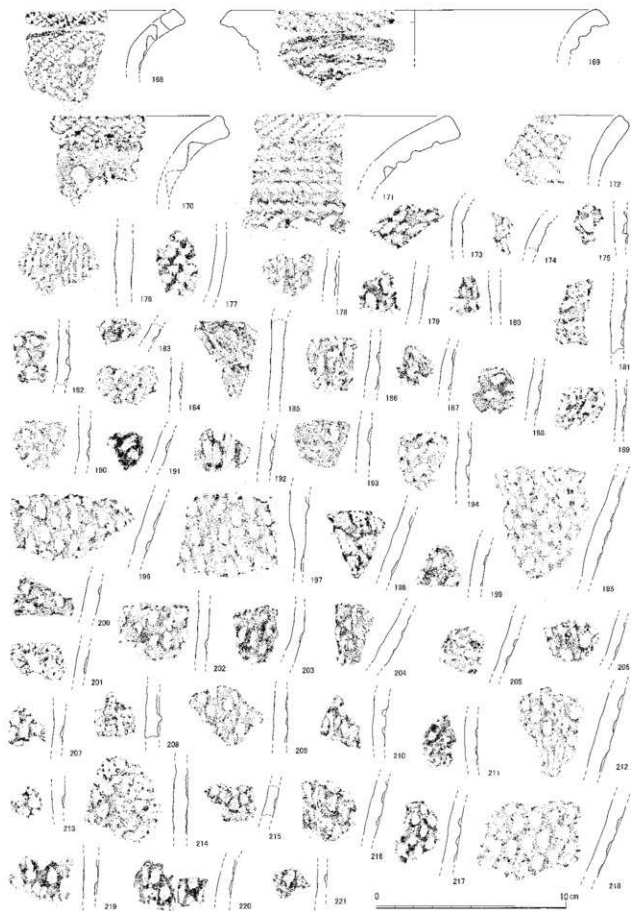




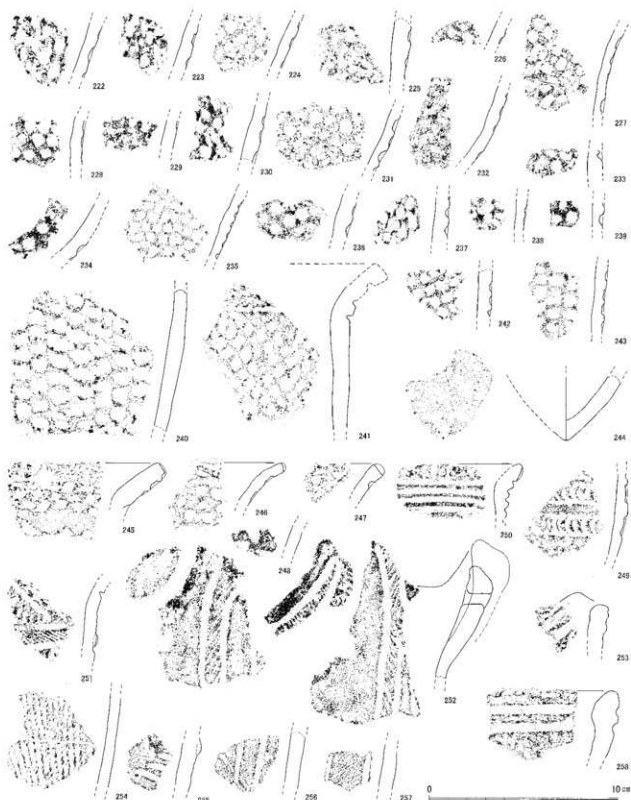
第 11 图 北地点出土縄文土器等实测图 (5) 1/2



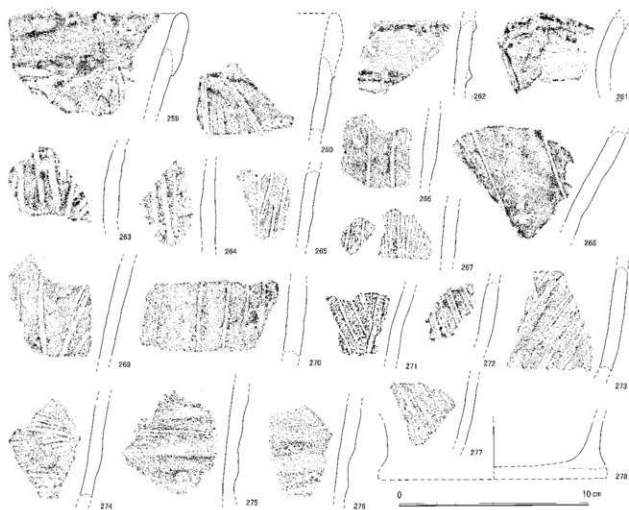
第 12 图 出土地点不明縄文土器等实测图 1/2



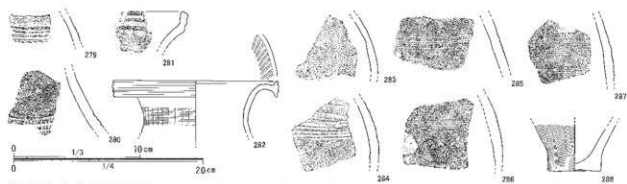
第 13 圖 南地点出土縄文土器実測図 (1) 1/2



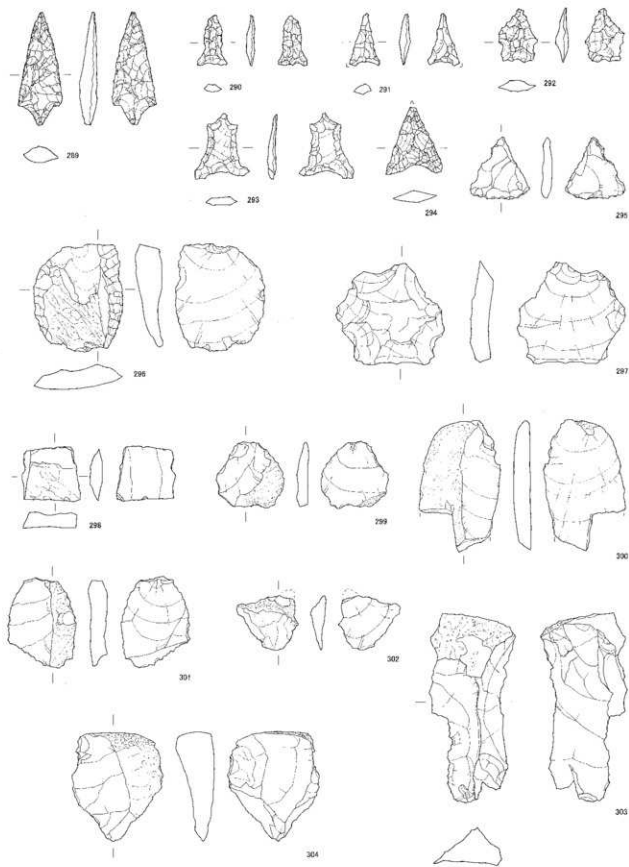
第 14 图 南地点出土绳文土器实测图 (2) 1/2



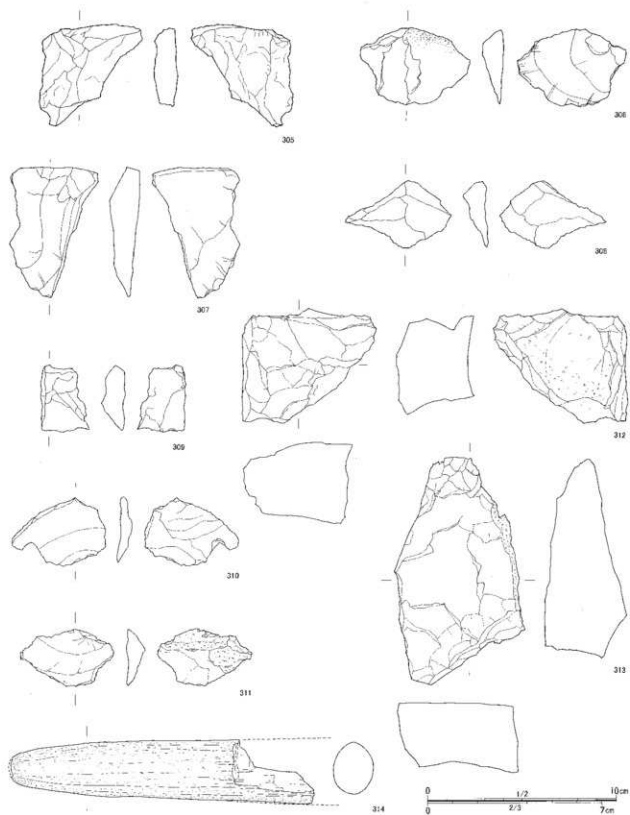
第15圖 南地点出土縄文土器実測図(3) 1/2



第16圖 弥生土器実測図 1/4(279~281・283~288-1/3、282-1/4)



第17图 石器类测图(1) (289・295～304:2/3, 290～294:1/1)



第 18 图 石器实测图 (2) (305 ~ 311:2/3, 312 ~ 314:1/2)



1: 遺跡遠景（南南東から）



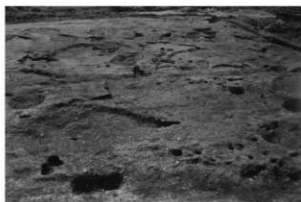
2: 北地点全景（南から）



3: 南地点全景（南から）



4: 南地点北部（南東から）

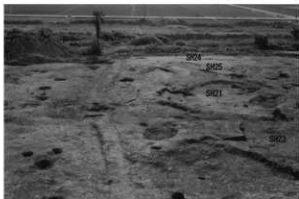


5: 南地点中央部（東から）

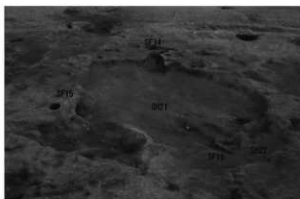
## 写真図版 2



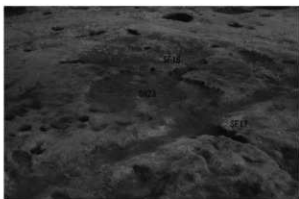
6: 南地点中央部(西から)



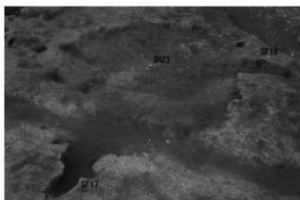
7: 南地点SH 21・23～25(東から)



8: 南地点SH 21・22、SF 14～16(北から)



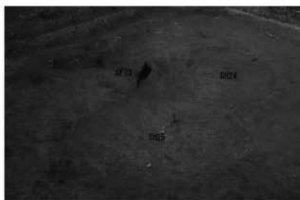
9: 南地点SH 23、SF 17・18(北から)



10: 南地点SH 23、SF 17・18(西から)



11: 南地点SH 23、SF 17・18(東から)



12: 南地点SH 24・25、SF 13(北東から)

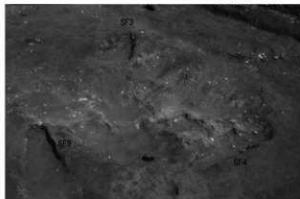


13: 南地点SF 1(北北東から)





14: 南地点S F 2(東北東から)



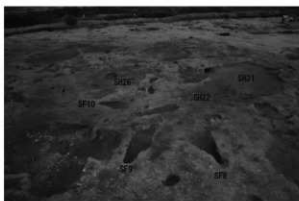
15: 南地点S F 3・4・9(南東から)



16: 南地点S F 4(北北東から)



17: 南地点S F 4・8~10(南から)



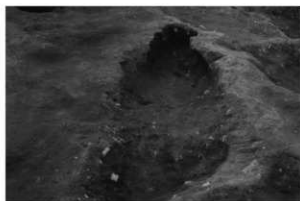
18: 南地点S H 21・22・26、S F 8~10(北西から)



19: 南地点S F 7(西北西から)

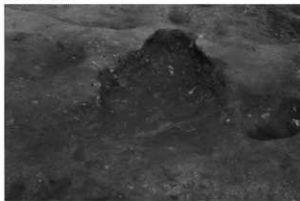


20: 南地点S F 8(東南東から)



21: 南地点S F 9(南東から)

写真図版 4



22: 南地点 S F 11 (西から)



23: 南地点 S H 24・25、S F 13 (東南東から)



24: 南地点 S F 13 (北東から)



25: 南地点 S F 14 (北から)



26: 南地点 S F 15 (西から)



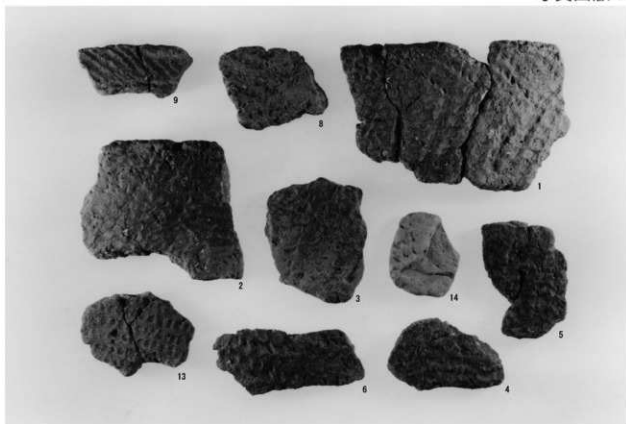
27: 南地点 S F 17 (東南東から)



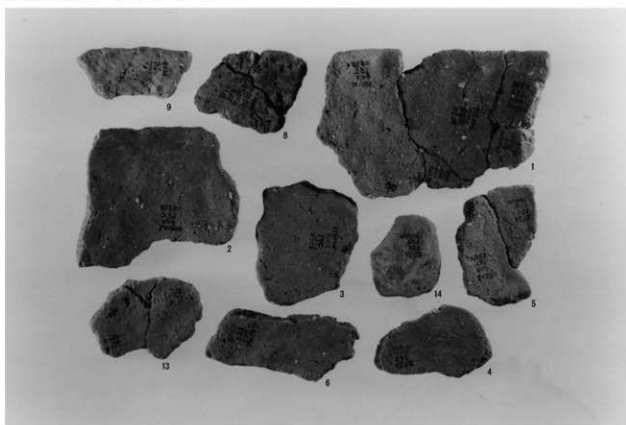
28: 南地点 S F 18 (北から)



29: 南地点 S F 19 (南西から)

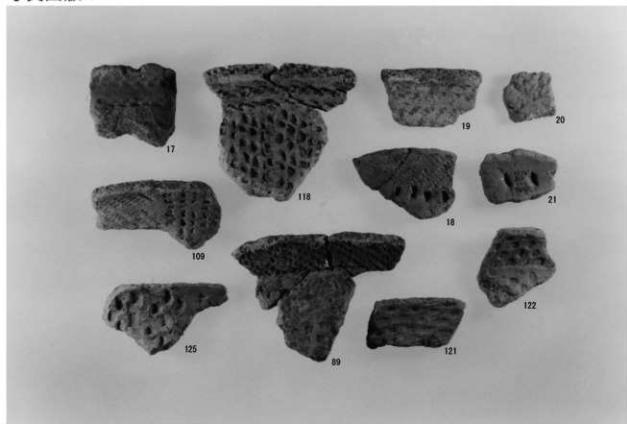


30: 土器 (表) (1 ~ 6 · 8 · 9 · 13 · 14)

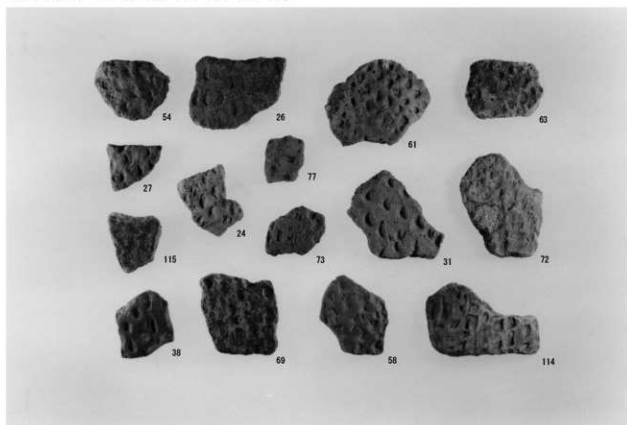


31: 土器 (裏) (1 ~ 6 · 8 · 9 · 13 · 14)

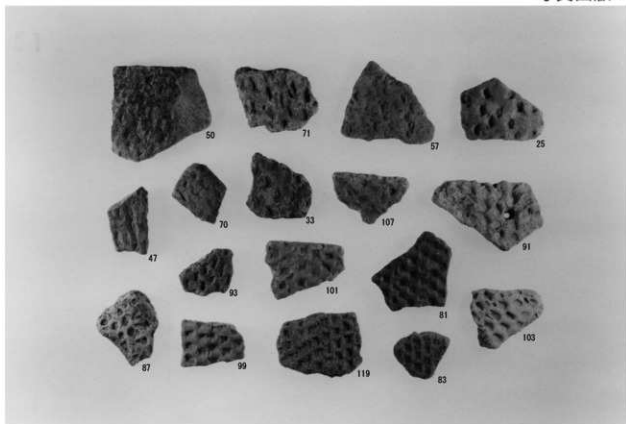
写真図版 6



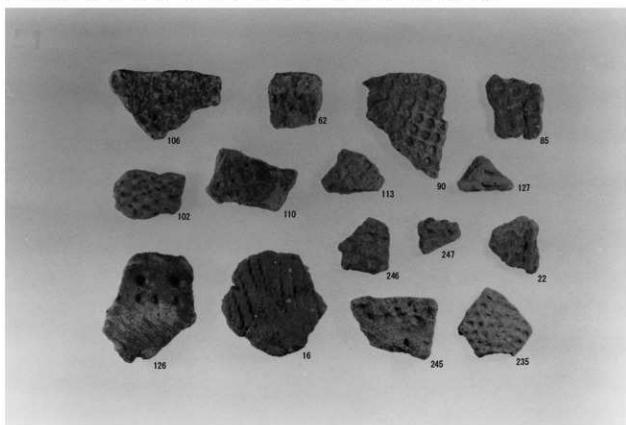
32: 土器 (17 ~ 21・89・109・118・121・122・125)



33: 土器 (24・26・27・31・38・54・58・61・63・69・72・73・77・114・115)

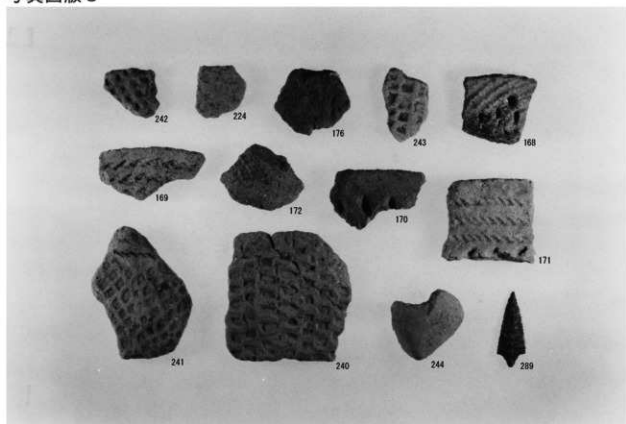


34: 土器 (25・33・47・50・57・70・71・81・83・87・91・93・99・101・103・107・119)

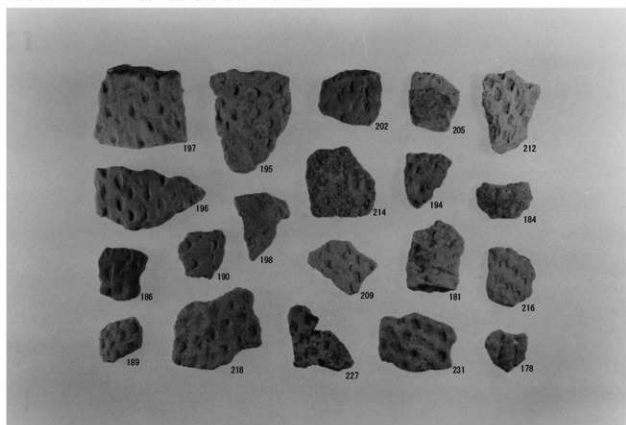


35: 土器 (16・22・62・85・90・102・106・110・113・126・127・235・245～247)

写真図版 8



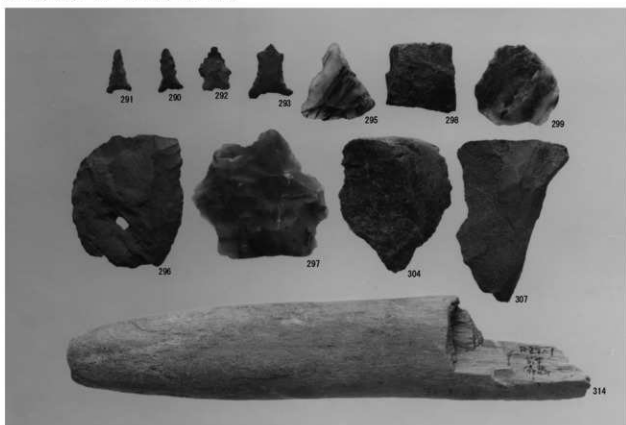
36: 土器・石器 (168 ~ 172・176・224・240 ~ 244・289)



37: 土器 (178・181・184・186・189・190・194 ~ 198・202・205・209・212・214・216・218・227・231)



38: 土器 (129・130・138・252・280・286)



39: 石器 (290～293・295～299・304・307・314)

# 報告書抄録

ふりがな	さかべらいせき 一じゆん・やぶいたいへん一							
書名	坂倉遺跡 一縄文・弥生時代編一							
副書名	研究紀要第25号							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	山田 猛							
編集機関	三重県埋蔵文化財センター							
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503				TEL 0596-52-1732			
発行年月日	2022(令和4)年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
さかべらいせき 坂倉遺跡 (BFSK)	みえけん たまたこ たまたこ 三重県 多気郡 多気町 おおさか のさしやい おおさか 大字 東池上 字 坂倉	2444	441-a273	34° 30′ 68″	136° 34′ 36″	1974.5.10 ～ 1974.6.28	北 440㎡ 南 1,320㎡ 計 1,760㎡	県営圃場整備事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
坂倉遺跡	集落遺跡	縄文時代早期	縄文早期の 竪穴住居や 煙道付竪穴	縄文早期初頭 の押型文土器	・大鼻式土器の標識遺跡 ・県指定史跡(720㎡)			
要約	<p>[発掘調査] 現地調査は、1974(昭和49)年に三重県営圃場整備事業に先立って坂倉遺跡発掘調査団によって実施された。</p> <p>[調査成果] 縄文時代早期と中世を中心としているが、その間の各時代の遺構・遺物も認められた。 縄文時代早期初頭の竪穴住居8棟程と煙道付竪穴19基程が検出・推定できた。 早期初頭頃の土器は大部分が押型文土器であり、大鼻遺跡例と共に大鼻式の基準資料とした。 煙道付竪穴を架梁型乾燥施設と推定した。</p> <p>[関係文献] 当遺跡に関しては、下記の文献で部分的に紹介されている。 1987年 梅澤裕・山田猛「一般国道1号亀山バイパス埋蔵文化財発掘調査概要Ⅲ 大鼻(二～三次)・山城(三次)遺跡」 (三重県教育委員会)縄文早期土器等の主要部分を紹介 1992年 奥義次「三重県多気郡 多気町の旧石器・縄文遺跡」(『多気町史』多気町)縄文土器等の主要部分を紹介 1994年 山田猛・森川幸雄・岸田早苗ほか「大鼻遺跡」(三重県埋蔵文化財センター)縄文早期土器等の大部分を紹介 2003年 小瀬学「三重県における縄文時代早期煙道付竪穴の認知—多気町坂倉遺跡検出例を中心に—」(『考古歴史博物館研究紀要』12、三重県立博物館)煙道付竪穴を紹介</p>							

研究紀要 第25号

坂倉遺跡 一縄文・弥生時代編一

発行年月 2022(令和4)年3月  
編集・発行 三重県埋蔵文化財センター  
印刷 三重県